

禁野本町遺跡

2007年3月

大阪府教育委員会

禁野本町遺跡

2007年3月

大阪府教育委員会

はじめに

大阪府北東部、枚方市に所在する禁野本町遺跡は、百済の王族の末裔であるという百済王氏に関連する遺跡として知られています。これまでの調査で百済王氏の邸宅跡かと考えられる掘立柱建物などの遺構が多数出土しています。また本調査区の南東500mに位置する百済寺跡はその氏寺と考えられ、現在国の特別史跡に指定されています。

このたび府営住宅建替えにあたり発掘調査を実施しましたところ、古代の掘立柱建物を検出したほか、これまで禁野本町遺跡では確認されていなかった弥生時代の竪穴住居も確認するなどの成果を上げることが出来ました。この報告書はこうした本調査の成果をまとめたものです。本書がこの地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施にあたりましては、地元の方々をはじめ関係各位の多大なご協力がありました。厚くお礼申し上げますとともに、今後とも本府の文化財保護行政にご理解とご協力をたまわりますようお願いいたします。

平成19年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 丹上 務

例　　言

1. 本書は、府営枚方住宅建て替え工事に伴い大阪府教育委員会が実施した、枚方市禁野本町遺跡発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府住宅まちづくり部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。平成16(04014)、17(05016)年度の発掘調査は、文化財保護課調査第一グループ技師井西貴子を担当者とし、整理作業については平成16年度は、井西、調査管理グループ林日佐子、藤田道子、平成17年度は、井西、林、藤田、報告書作成事業としては、平成18年度に井西、三宅正浩、藤田を担当者として実施した。
3. 本書の写真測量は、株式会社かんこうに委託した。なお、フィルムについては株式会社かんこうで保管している。
4. 本書に掲載した遺物写真の撮影は阿南写真工房に委託した。
5. 本書に用いた標高は、特に付記した場合を除いてすべてT.P.（東京湾標準潮位）による。また座標は国土座標を使用し、挿図中に示す方位は座標北である。
6. 調査・遺物整理・報告書作成に要した費用は、全額を大阪府住宅まちづくり部が負担した。
7. 本書の執筆は、第1章を井西が、第2章を井西、丸山香代（帝塚山大学日本文化学科3回生）、第3章を井西と伊藤文彦（文化財保護課調査員、現：三重県教育委員会 埋蔵文化財センター技師）、高田麻美（京都大学文学部考古学専攻4回生）、第4章を伊藤が執筆分担し、編集は井西が行った。文責は文末に示した。
8. 調査に際しては、大阪府住宅まちづくり部、枚方市教育委員会、(財)枚方市文化財調査研究会、地元自治会をはじめ、多くの方々に御指導、御助言をいただいた。ここに厚く感謝する次第である。
9. 本書は300部印刷し、一部あたりの単価は、782円である。

目 次

第1章 調査経過.....	1
(1) 調査に至る経過.....	1
(2) 地区割り.....	1
第2章 地理的・歴史的環境.....	3
第3章 調査結果.....	8
(1) 基本層序.....	8
(2) 遺構と遺物.....	13
① 平成16年度調査 (04014).....	13
1 概観.....	13
2 弥生時代.....	13
3 古墳時代.....	16
4 古代から中世.....	18
5 包含層出土遺物.....	21
② 平成17年度調査 (05016).....	25
1 概観.....	25
2 弥生時代.....	25
3 古墳時代以降.....	26
4 包含層出土遺物.....	30
第4章 まとめ.....	31
報告書抄録.....	38

挿 図 目 次

- 第1図 調査区地区割図
第2図 周辺遺跡分布図（1）
第3図 周辺遺跡分布図（2）
第4図 平成16年度調査（04014）調査区地形模式図
第5図 平成17年度調査（05016）西側土層断面図
第6図 平成17年度調査（05016）北側土層断面図
第7図 平成16年度・17年度調査区全体図（1）
第8図 1区 1号竪穴住居平面図・断面図・出土遺物実測図（04014）
第9図 1区 2号竪穴住居平面図・断面図（04014）
第10図 1区 3号竪穴住居平面図・断面図（04014）
第11図 1区 4号竪穴住居平面図・断面図・出土遺物実測図（04014）
第12図 1区 5号掘立柱建物平面図・断面図（04014）
第13図 2区 6号掘立柱建物平面図・断面図（04014）
第14図 1・3区 7号掘立柱建物平面図・断面図・出土遺物実測図（04014）
第15図 2区 小穴195平面図・断面図・出土遺物実測図（04014）
第16図 2区 土坑215平面図・断面図・出土遺物実測図（04014）
第17図 包含層出土遺物実測図（04014）
第18図 石製品実測図（04014）
第19図 2区 溝74平面図・断面図・遺物出土状況図・出土遺物実測図（05016）
第20図 2区 溝86平面図・断面図、8号竪穴住居平面図・断面図（05016）
第21図 1区 土坑3平面図・断面図・出土遺物実測図（05016）
第22図 2区 土坑71・溝72 平面図・断面図・出土遺物実測図（05016）
第23図 2区 小穴114平面図・断面図・出土遺物実測図（05016）
第24図 包含層出土遺物（05016）
第25図 周辺既往調査区位置図
第26図 掘立柱建物方位と百済寺中軸線からのずれ幅分布状況

表 目 次

表1 堀立柱建物主軸方向一覧

表2 禁野本町遺跡動向・百済王氏動向・交野行幸関連記事一覧

図 版 目 次

図版一 遠景

図版二 平成十六年度一区全景

図版三 平成十六年度一区竪穴住居検出状況

一号・二号竪穴住居

図版四 平成十六年度一区竪穴住居検出状況

三号・四号竪穴住居

図版五 平成十六年度一区五号掘立柱建物

検出状況、柱穴十一、柱穴十四、柱穴十八

図版六 平成十六年度一・二区掘立柱建物

六号・七号掘立柱建物

図版七 平成十七年度全景

図版八 平成十七年度一区

西側段丘崖検出状況、全景

図版九 平成十七年度二区

全景（部分）、八号竪穴住居・溝八十六、溝七十四

図版十 遺物写真

図版十一 遺物写真

図版十二 遺物写真

図版十三 遺物写真

図版十四 遺物写真

図版十五 遺物写真

第1章 調査経過

(1) 調査に至る経過

府営「枚方住宅」が所在する枚方市禁野本町は、禁野本町遺跡の範囲内である。老朽化した府営住宅建て替え計画が住宅整備課より策定された段階で、文化財保護課との協議が始められた。その結果まず遺跡の状況を調査するため、平成12年度調査第一グループ（当時）宮崎泰史を担当者として試掘調査が実施された。

試掘調査では府営住宅敷地内に合計6カ所のトレンチが設定された。そのトレンチのうち、5カ所で遺物包含層、最終地山面でピット、溝などの遺構（遺物が細片であったため詳細な時期は不明）が確認された。文化財保護課は、この試掘結果と周辺に展開する（枚方市教育委員会による調査成果^{注1・注2}）遺跡の状況等から判断して、府営住宅敷地内の発掘調査が必要との回答をした。なお本調査では、包含層の堆積が薄く、場所によっては遺構が表土下すぐに検出されるという遺跡の状況から、いずれの工事においても遺構面に達する可能性が高いため、府営住宅敷地内全体を調査するということでの、住宅整備課と合意した。

以上の協議に基づいて、平成16年4月に建築都市部長から教育委員会教育長あて埋蔵文化財調査の実施について依頼があった。

本調査は平成16年度（04014）に、まず仮設道路建設部分から調査を開始し敷地南側部分（5400m²）、17年度（05016）は残り北側部分（3435m²）を二年度に渡って実施した。

注1 （財）枚方市文化財調査研究会 2003 「禁野本町遺跡Ⅱ」（都市基盤整備公団中宮第2団地建替工事に伴う禁野本町遺跡第103次発掘調査報告書）

注2 大阪府 1934 大阪府史蹟名勝天然記念物保存調査会「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書第4輯 石済寺趾の調査」

(2) 地区割り（第1図）

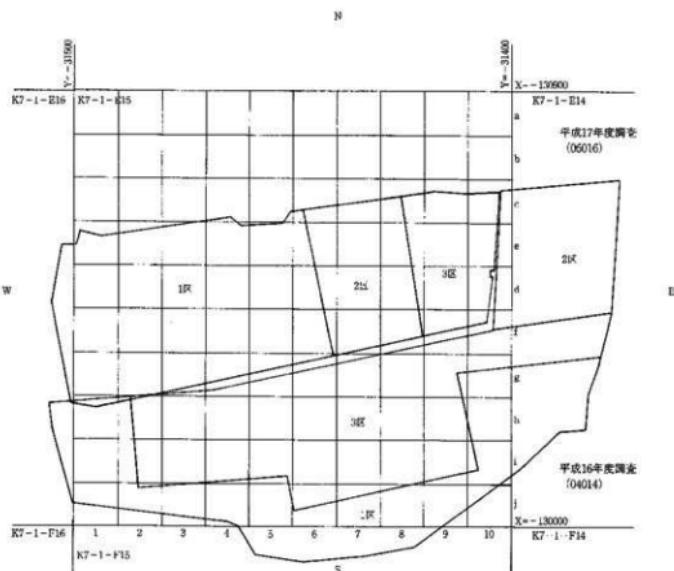
平成14年度国土座標値の基準が、世界測地系へ変更されるに伴い、従来の座標値が変更された。そのため従来大阪府が独自に採用していた第Ⅰ区画が採用できなくなったが、便宜上従来の第Ⅳ区画（国土座標値による10m方形の最小区画）の座標値で囲われた部分の地区名を新座標値内の地区名として呼称した。表示方法は、第Ⅳ区画のラインに与えた北東端を基点に、南北をa～j、東西を1～10とし、区画名はラインの北東交差点を使うという方法を踏襲した。

調査は二年度にわたって実施しているため、いずれの調査かを示すために調査番号を記した。平成16年度調査が04014で、平成17年度調査が05016である。

調査区の設定については、調査区内ほぼ中央に通っている現在の生活道路を南側に付け替える必要があった。そのため新設道路建設部分と工事用進入路建設部分から調査を開始し（1区）、次いで隣

接する北側に調査区を設定（2区）、最終的に現在の生活道路の移設が完了した後、その部分と未調査部分を含めて調査区を設定した（3区）（04014、平成16年度）。平成17年度については、住宅整備課からの依頼で、住宅建設の基礎工事にかかる部分から優先的に調査を実施する必要があり、その部分から調査区を設定（1区）、残りの調査区は基礎工事と平行して実施する予定であったため、掘削上の仮置き場との関係から調査区を分割し順次調査を進めた（2、3区）。

（井西貴子）



第1図 調査区地区割図

第2章 地理的・歴史的環境（第2、3図）

大阪府と奈良県の府県境を示す生駒山地は、北東から南西にかけて流れる淀川に向かって、北から男山丘陵、長尾丘陵、枚方丘陵を派生させている。男山丘陵と長尾丘陵は、北西流する船橋川によって分断され、長尾丘陵と、枚方丘陵の間には、穂谷川と天野川が存在し、二つの川の間に交の台地が展開される。本遺跡は、天野川右岸の交野台地から舌状にはりだす台地の突端に位置する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、主に男山丘陵や長尾丘陵などの丘陵上において確認されているが、その数は多くない。

生駒山地から淀川にむかってせり出す男山丘陵の突端近くに存在する楠葉東遺跡では、ナイフ形石器・削器・尖頭器・石核・翼状剥片など、約800点の資料が検出されている。また長尾丘陵上に位置する藤阪宮山遺跡では、石器が集中して出土する状況が2カ所で確認され、さらに楕円形の焼土坑も検出されている。このほか、生駒山麓の津田三ツ池遺跡や交野台地上の交北城ノ山遺跡などで、後世の包含層から旧石器時代の資料が検出されている。

縄文時代

縄文時代になると交野台地へと連なる生駒山地西麓縁辺部で遺跡が出現する。神宮寺遺跡（早期）、穂谷遺跡・津田三ツ池遺跡（前期）などが確認されており、中期末では生駒山地の枚方丘陵に連なる山地の縁辺部で星田旭遺跡が、晩期になると交野台地、枚方丘陵にも遺跡が広がり、交北城ノ山遺跡、岡東遺跡が確認されている。

神宮寺遺跡は大阪府下において縄文時代早期を代表する遺跡の一つである。炉跡などの遺構とともに、多量の土器が出土している。その土器の大部分は、外面を貝または木片によって施文することを特徴とし、この土器は神宮寺式土器と呼ばれ、西日本縄文早期の標式土器となっている。穂谷遺跡では神宮寺式土器や前期の爪形土器（北白川I式）、山形文を施紋した土器などが出土している。交北城ノ山遺跡では石劍や石棒などが出土し、晩期の大形の深鉢をおさめたいわゆる埋甕遺構が3カ所で検出された。

禁野本町遺跡の周辺では天野川を挟んだ対岸の岡東遺跡で晩期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代以降は遺跡の数が増加し、前期から交野台地上において遺跡は出現する。中期後半から後期にかけて、遺跡はより標高の高い長尾丘陵や枚方丘陵上に確認される。

天野川右岸の星丘西遺跡では、前期にさかのぼる土器が出土し、中期には竪穴住居からなる居住域と、方形周溝墓、円形周溝墓、土器棺からなる墓域とが検出された。この遺跡近くにある村の遺跡でも中期の竪穴住居が検出されている。後期に入ると、天野川左岸の枚方丘陵上に鷹塚山遺跡、山之上天堂遺跡、藤田山遺跡が営まれる。鷹塚山遺跡では竪穴住居の内部に地山削り出しのベッド状遺構や住居奥壁隅に据え付けられた二連窓と思われる遺構が確認されている。このほか小型仿製青銅鏡、分

銅形土製品なども出土している。山之上天堂遺跡では、隅丸方形の竪穴住居の他に、一片約4.5mの六角形の竪穴住居が検出されている。禁野本町遺跡でも今回の調査で円形竪穴住居が2棟検出された。

穂谷川流域では前期後半の遺物が出土する招堤中町遺跡を初現として、統いてその対岸に中期初頭の交北城ノ山遺跡が営まれる。招堤中町遺跡では方形周溝墓30基と竪穴住居2棟（中期）が検出され、交北城ノ山遺跡では、42基の方形周溝墓と、その下層から9棟の竪穴住居がそれぞれ検出された。いずれの遺跡も中期後半には廃絶する。中期から後期にかけて、穂谷川右岸の長尾丘陵上に田口山遺跡、長尾西遺跡、ごんぼう山遺跡、藤阪東遺跡が相次いで出現する。とりわけ田口山遺跡では20棟以上の竪穴住居や、断面V字溝も検出されており、大規模な高地性集落の様相を呈する。こうした丘陵上に位置する遺跡の多くは古墳時代に入ると廃絶する。

古墳時代

天野川右岸には、全長110mの前方後円墳である禁野東塚古墳（前期）が築かれる。穂谷川左岸に全長107.5mの二重空濠をもつ前方後円墳の牧野東塚古墳（中期）が築かれる。後期になると天野川を望む交野台地の尖端に白雉塚古墳が、また穂谷川右岸の長尾丘陵には円墳のごんぼう山古墳がそれぞれ築かれる。白雉塚古墳は本調査地の北側に隣接した位置にあり、墳丘形態は直径30mの円墳であるとされる。内部に片袖式の畿内型横穴式石室を持ち、石室内壁に赤色顔料を塗布するという特異なもので、鉄刀・鉄鎌・馬具などが出土している。現在は全くその痕跡をとどめていないが、旧地形図からは前方後円墳であった可能性も指摘できよう。

古墳時代の集落の様相はさほど明らかとはなっていないが、天野川流域では星丘遺跡・茄子作遺跡（初頭から中期）、村野遺跡（初頭から前期、後期）が確認され、穂谷川流域では交北城ノ山遺跡・小倉東遺跡、藤阪南遺跡（初頭から中期）、招堤中町遺跡・長尾西遺跡・出畠敷遺跡・九頭神遺跡・渚遺跡・津田トッパナ遺跡・田口中島遺跡（初頭から前期）などで集落が確認されている。

古代～中世

古代において禁野本町遺跡は河内国交野郡に属していた。交野郡では西山廃寺、船橋廃寺、九頭神廃寺、中山觀音寺などの古代寺院が知られ、禁野本町遺跡の南東には百濟寺跡がある。百濟寺は百濟王族の末裔である百濟王敬福が河内国交野郡に移住し、そこで創建した寺院であるという。「続日本紀」には延暦二年（783年）十月に桓武天皇が交野行幸に際して、稻束を百濟寺に施入する記事がみえ、その後も交野行幸の際にたびたび稻束や錢を施入している。現在百濟寺はその基壇だけが残るが、中門から伸びる回廊が二塔を取り囲んで金堂にとりつく伽藍配置である。またその周辺に広がる中宮尼寺田遺跡や、禁野本町遺跡では飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物が多数検出されており、これら百濟王氏との関連が注目される。

交野郡ではこのほか四天王寺の瓦窯としてしられる楠葉・平野山瓦窯や、鎌倉時代に操業した栗倉瓦窯、瓦質土器を生産した楠葉野田遺跡などの瓦生産、土器生産に関連する遺跡も多い。

近世以降

禁野本町遺跡の西方500mの淀川沿いを北東から南西に走る現在の府道13号線（旧国道1号線）は

ものと京街道をほぼ踏襲している。京街道は大阪と京都を結ぶ街道で、豊臣秀吉が文禄年間（1592～96）に淀川堤防を改修し、整備したものである。江戸時代には江戸から京都を経て大阪まで達する街道の一環として重視され、伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿の4宿場が設けられた。枚方宿の成立年代は明らかでないが、寛永年間（1624～1644）には、岡新町村、岡村、三矢村、泥町村の4ヶ村が指定されている。とりわけ三矢村には本陣、脇本陣、問屋場、高札場などが設けられ、枚方宿の中心的な役割を担っていた。

近代以降、禁野本町遺跡一帯は、旧陸軍の火薬庫がおかれていたことが知られている。昭和14年3月1日にはこの火薬庫で大規模な爆発事故が起り、大惨事となったという。今回の調査区の北側における調査では、この火薬庫に關係する遺構が検出されているほか、当時の火薬庫内で延焼を防ぐために築造された土塁が現在でもその跡地に立つ中宮団地内に保存されている。

（丸山香代・井西）

<参考文献>

- 枚方市 1967年 『枚方市史 第一巻』
枚方市 1972年 『枚方市史 第二巻』
枚方市 1986年 『枚方市史 第十二巻』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1992年 『枚方市文化財年報11（1989年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1996年 『枚方市文化財年報16（1994年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1996年 『枚方市文化財年報17（1995年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1998年 『枚方市文化財年報19（1997年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1999年 『枚方市文化財年報20（1998年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 2000年 『枚方市文化財年報21（1999年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 2001年 『枚方市文化財年報22（2000年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 2002年 『枚方市文化財年報23（2001年度分）』
財団法人枚方市文化財研究調査会 2005年 『枚方市文化財年報26（2004年度分）』
枚方市教育委員会 2003年 『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要2002』
財団法人枚方市文化財研究調査会 2003年 『枚方市禁野本町遺跡II』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1986年 『枚方市文化財年報VI』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1987年 『枚方市文化財年報VII』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1989年 『枚方市文化財年報IX』
財団法人枚方市文化財研究調査会 1988年 『図録・枚方の遺跡』



47 小寺塚跡	75 村賀南山遺跡	86 伊加賀遺跡	111 草野町北山遺跡
48 小寺跡	76 村賀遺跡	89 山之上天童遺跡	112 中宮山寺田遺跡
49 放物草原古墳群	77 墓丘遺跡	102 鹿野古墳	113 枇方町内町遺跡
50 アガウ遺跡	78 墓丘西遺跡	107 万代寺山遺跡	134 岡東遺跡
51 岩井瓦窯跡	79 百済寺遺跡	108 村方上之寺遺跡	141 放物草原遺跡
52 清透跡	80 白拂塚古墳	109 墓野上野古墳	142 斎洞御野寺遺跡・梵鐘
53 清貫遺跡	81 鹿川門戸遺跡〔その2〕	112 枇方聖遺跡	150 二ノ宮墓所
54 領西山古墳	83 万代寺山古墳	113 丸ヶ丸原古墳	151 古美寺跡
	84 枇方小学校前古墳	114 中宮ドンバ遺跡	152 犬野東摩摩遺跡
	85 萩原山古墳		153 枇方田中郷のむく
			155 国宮遺跡

第2図 周辺遺跡分布図（1）



- | | | | | |
|-------------|-----------|--------------|-------------|-----------------------|
| 19 稲荷寺内村遺跡 | 33 長尾西遺跡 | 55 文化城ノ山遺跡 | 124 山田池南方遺跡 | 144 田山生時代遺跡 |
| 21 猿古墳 | 36 長尾遺跡 | 56 田口市島遺跡 | 125 山田池北方遺跡 | 148 田口灰墓 |
| 22 比丘尼塚古墳 | 37 長尾古墳遺跡 | 57 中宮・北之宮古墳群 | 126 藤坂2号墓跡 | 149 今钟姫比良跡伝承地 |
| 24 幸山遺跡 | 38 田口山遺跡 | 115 猿古墳群 | 127 藤坂1号墓跡 | 150 里見野街道 |
| 26 丸鏡神道跡 | 39 猿坂東遺跡 | 119 猿久丘遺跡 | 128 鹿坂山遺跡 | 157 亥田河 |
| 28 稲荷中町遺跡 | 42 藤坂遺跡 | 120 田中御物工場跡 | 131 宇山2号墳 | 159 田中中東住宅・精化工場 |
| 30 北山遺跡 | 43 猿坂南遺跡 | 121 甲斐田町山遺跡 | 132 ごんぼう山古墳 | 166 清水寺木造普賢坐金剛・文殊菩薩坐像 |
| 31 稲荷今治遺跡 | 44 出屋桑遺跡 | 122 出屋桑西遺跡 | | 172 犬山城生糸湖私立地 |
| 32 日置山遺跡 | 45 田山田遺跡群 | | | |
| 46 ごんぼう山遺跡群 | | | | |

第3図 周辺遺跡分布図（2）

第3章 調査結果

(1) 基本層序 (第4・5・6図)

本調査区は、西・南側に落ちる舌状台地に位置する。遺構面は基本的には地山面1面で、台地が落ちる西・南側と2区、北側 (K7-1-E15-C1, 2区のみ第3層上面でも遺構が検出された。) で包含層が確認された。

第4図は、平成16年度調査区の南北断面模式図である。遺構面は部分的に後世の搅乱により削平されているが、地山面の標高は北側で32.2m、南側で32.0mと緩やかに南に下っている。

1区、西側断面 (05016) (第5図)

第0層 32.9m (上面) ①～③ 盛土、表土。層厚40cm。

第1層 32.5m ④ 旧耕土。層厚20cm。

第2層 32.3m ⑤ 整地土。層厚20～70cm。10YR5/8黄褐色土。本調査地を耕作地として利用する際の整地土で、遺物は須恵器、土師器の細片 (古墳時代前期、近世) が少量確認された。

第3層 32.0m ⑥ 整地土。層厚20～25cm。7.5YR3/4黄褐色土に7.5YR7/8黄褐色粘質土がブロック (40%) で混じる。第2層の堆積中の間層であり、ブロックで確認された。第3層も本調査地を耕作地として利用する際の整地土である。遺物は須恵器、土師器の細片 (古墳時代前期、近世) が少量確認された。

第4層 31.7m ⑧～⑪ 谷の堆積土である。層厚50～100m。遺物は古墳時代後期の須恵器、土師器片などが確認された。

⑧ 10YR5/5灰白色土+10YR6/1褐灰色土。 ⑩ 7.5YR6/8橙粘質土。

⑨ 7.5YR4/1褐灰色粘質土。 ⑪ 2.5Y5/1黄灰色微砂混り粘質土。

2区、北側断面 (05016) (第6図)

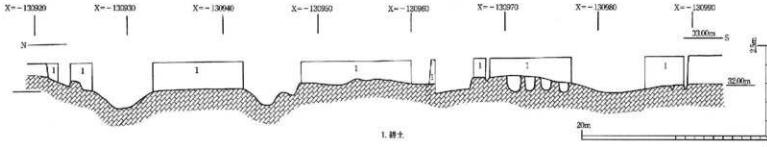
第0層 32.8m (上面) ① 盛土。層厚30cm。

第1層 32.3m ② 包含層。層厚10cm。10YR4/6褐色土。遺物は須恵器、土師器の小片 (古代から近世) などが確認されたが、時期の詳細は不明。

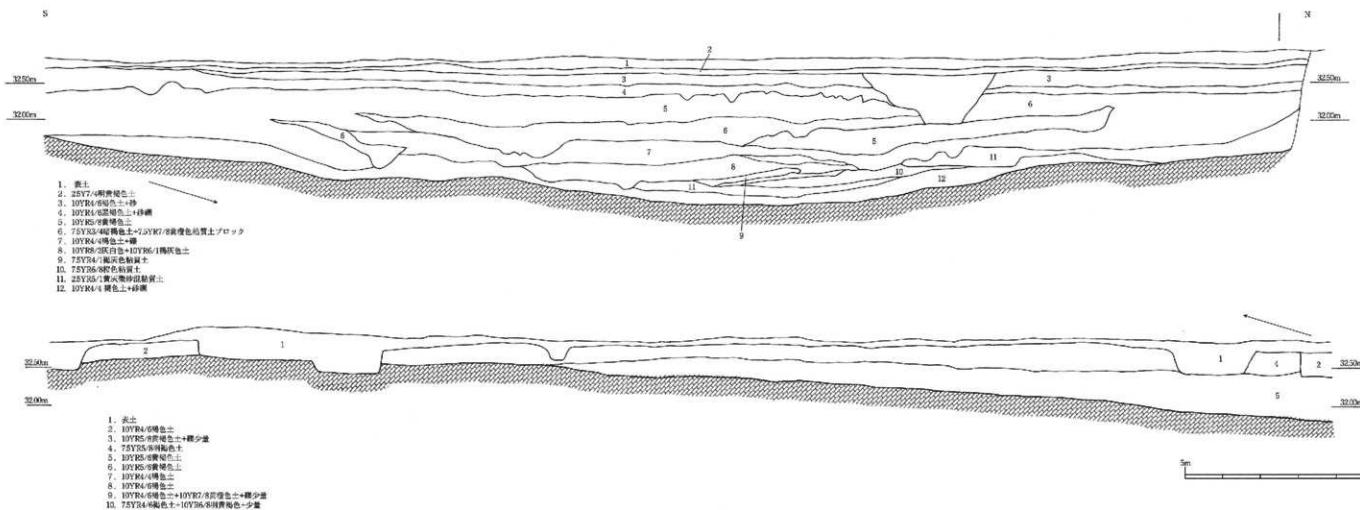
第2層 32.2～32.3m ⑤ 包含層。層厚10～30cm。10YR5/8疊混り黄褐色土。遺物は須恵器、土師器の小片 (古代から近世) などが確認されたが、時期の詳細は不明。

第3層 32.2m。10YR5/8明褐色土。Y=-31410ラインより始まり、Y=-31420ラインまで、面的には調査区北側端より南にほぼ幅1mで終わる。遺物は古墳時代前期の須恵器、土師器の小片などが確認された。上面は遺構面である。

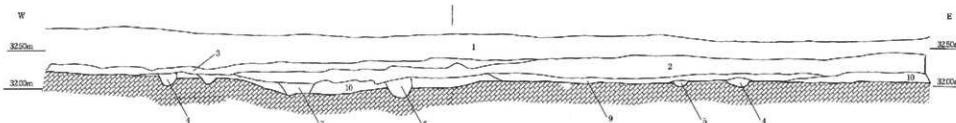
(井西)



第4図 平成16年度（04014）調査区地形模式図



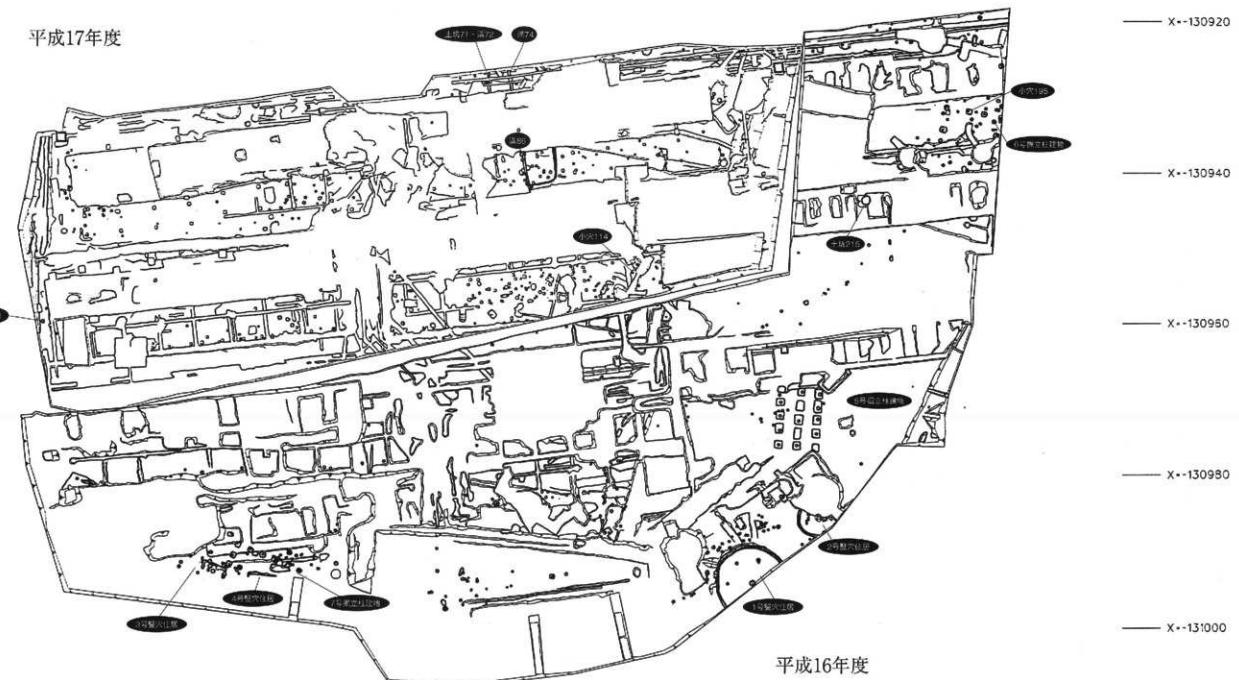
第5図 平成17年度（05016）西側土層断面図



第6図 平成17年度（05016）北側土層断面図

Y-31500 Y-31480 Y-31460 Y-31440 Y-31420 Y-31400 Y-31380

平成17年度



第7図 平成16年度・17年度 調査区全体図 (S=1/500)

(2) 遺構と遺物

① 平成16年度調査（04014）（第7図）

1 概観

遺構番号については、調査時のものをそのまま記載した。ただし、竪穴住居と掘立柱建物については、調査時にはすべての建物に番号を付けていないので、報告書作成時に新たな番号を付した。

基本層序の項目でも述べたように、基本的に地山面上で遺構が検出された。遺構の埋土は大きく3種類に分類することができ、それぞれの埋土と出土遺物を検討した結果、弥生時代から古代・中世までの3種類に分類することができた。

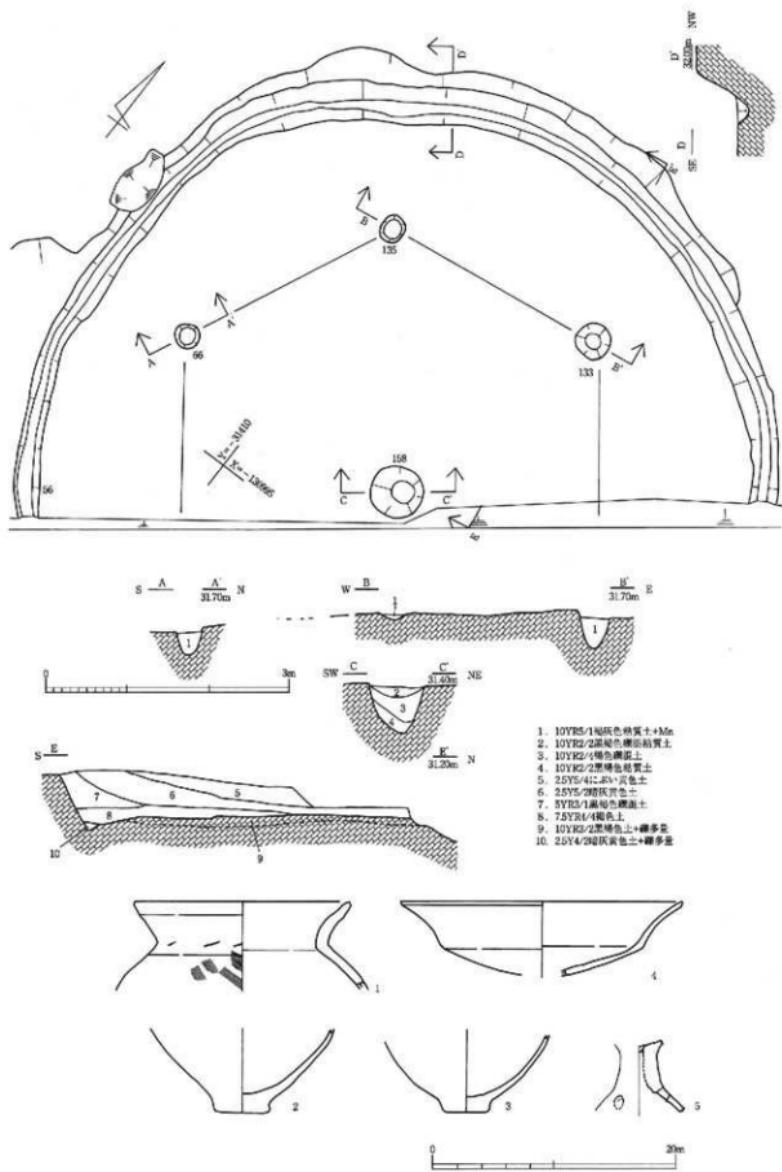
弥生時代の遺構としては、2基の円形竪穴住居を検出した。そのうち1号竪穴住居は6本の主柱を持ち復元径9.3mと規模が比較的大きく注目される。また禁野本町遺跡において、弥生時代の円形竪穴住居が検出されたのは初めてである。

古墳時代の遺構としては2基の方形竪穴住居を検出した。このうち3号竪穴住居はかまと跡が検出されたことが注目される。

古代以降では、掘立柱建物群を検出した。特に7号掘立柱建物の柱穴290からは黒色土器の碗が出土している。平安時代の遺構と考えて良いだろう。

2 弥生時代

1号竪穴住居（第8図）K 7-1-E15-j,i·1,2、調査区南東端に検出された竪穴住居である。平面形は復元径9.3mの円形であり、面積は約68m²と推定される。住居の南東側は調査区外へと続く。壁溝は良好に遺存しており、約16mを検出した。幅は、0.3m~0.5m、深さは約0.1~0.2mである。検出した床面の標高は、31.2mである。柱穴は66、133、135の3カ所が確認されており、残りの3カ所が調査区外に存在すると推定すれば、主柱が6本の竪穴住居に復元できよう。柱穴の平面形は円形で直径は0.3m~0.4m、深さは0.1m~0.4mを測り、柱穴間の距離は2.9mである。柱穴の埋土は10YR5/1褐色灰色粘質土である。このほか、住居中央からは、直径0.65m、深さ0.57mの円形中心土坑158を検出した。竪穴住居の覆土は4層に分かれる。このうち上層の5と6は、府営住宅建設以前に耕地を造成した際の整地土と考えられる。また8からは、庄内式併行期の土器（1）～（5）が出土しているが、いずれもこの円形竪穴住居にともなう遺物ではないだろう。なお住居の床面からは、少量の弥生土器片が出土している。（1）は甕の口縁部である。外面はハケ調整、内面はナデ調整であり、頸部下部にハケのあたった痕跡が残る。復元口径は17.5cm、残存器高は7.3cm、焼成は良好で、胎土は密ながら最大4mmの砂粒を10%含む。色調は内外面共に10YR8/4浅黄橙色~10YR8/2灰白色で断面は10YR3/1黒褐色である。（2）は甕の底部である。底部は丸みを帯び、平面上に設置すると不安定になる。二次被熱が激しく、器壁は剥離し、赤変は底部にまで及んでいる。底部外面にわずかにタタキ目が観察できるが圓化はしえなかった。底部径は4.6cm、残存器高は6.9cm、焼成は良好、胎土はやや粗く、最大4mmの砂粒を20%程度含んでいる。色調は外面が10YR8/6黄橙色、内面と断面は



第8図 1号竪穴住居平面図・断面図 ($S=1/60$)・出土遺物実測図 ($S=1/4$)

2.5YR6/6橙色である。(3)は甕の底部である。風化が激しく、調整は不明である。底径は4cm、残存器高は6.7cm。焼成は良好で、胎土は密ながらも最大3mmの砂粒を10%含んでいる。色調は外面が10YR8/1灰白色、内面と断面は10YR3/1黒褐色である。

(4)は高坏の坏部である。風化が激しく、調整は観察しえない。復元口径は23cm、残存器高は6.1cm。焼成は良好で胎土も密ながら最大3mmの砂粒を10%程度含んでいる。

第9図 1区 2号竪穴住居平面図・断面図 (S=1/60)

色調は内外面共に10YR8/1灰白色、断面は10YR3/1黒褐色。(5)は高坏の脚部である。円形の透孔は2カ所で確認できたが、その配置から三方にもつと考えられる。脚部は中空で、坏部の底にごく小さな粘土の塊を充填しており、脚部と坏部を連続して成形していると考えられる。焼成は良好で胎土も密ながら、最大3mmの砂粒を10%程度含んでいる。色調は内外面、断面のいずれも10YR8/1灰白色。

(4)と同一個体

であるかどうかは判然としないが、胎土や色調には共通点が多い。

2号竪穴住居

(第9図)

K 7 - 1 - E14 -

i10, K 7 - 1 -

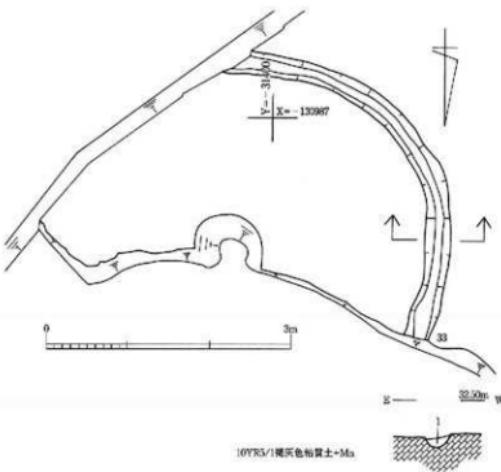
E15 - i11, 1号竪

穴住居の東側に隣接して検出された

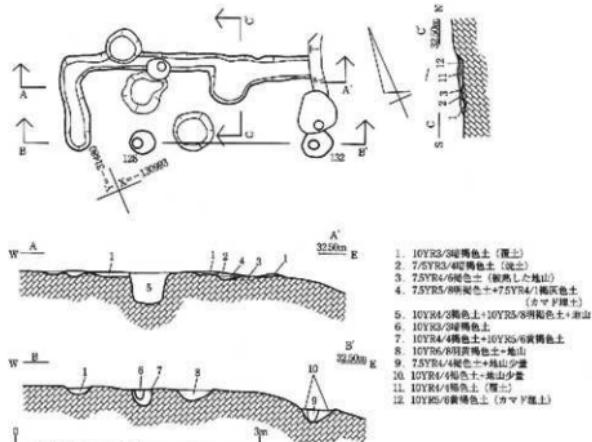
竪穴住居である。

平面形は復元径

5.5mの円形であ



第9図 1区 2号竪穴住居平面図・断面図 (S=1/60)



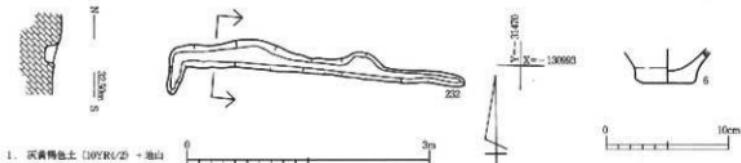
第10図 1区 3号竪穴住居平面図・断面図 (S=1/60)

り、面積は23.7m²と推定される。住居の北側は擾乱によって残存せず、また南東側は調査区外へと統く。竪穴壁は残存せず、壁溝のみ検出された。壁溝の残存長は5m、幅は0.2m～0.3m、深さは0.1mである。柱穴は確認されていない。この2号竪穴住居から遺物は出土していないが、隣接する弥生時代の1号竪穴住居と平面形が共通することから、弥生時代の竪穴住居とした。

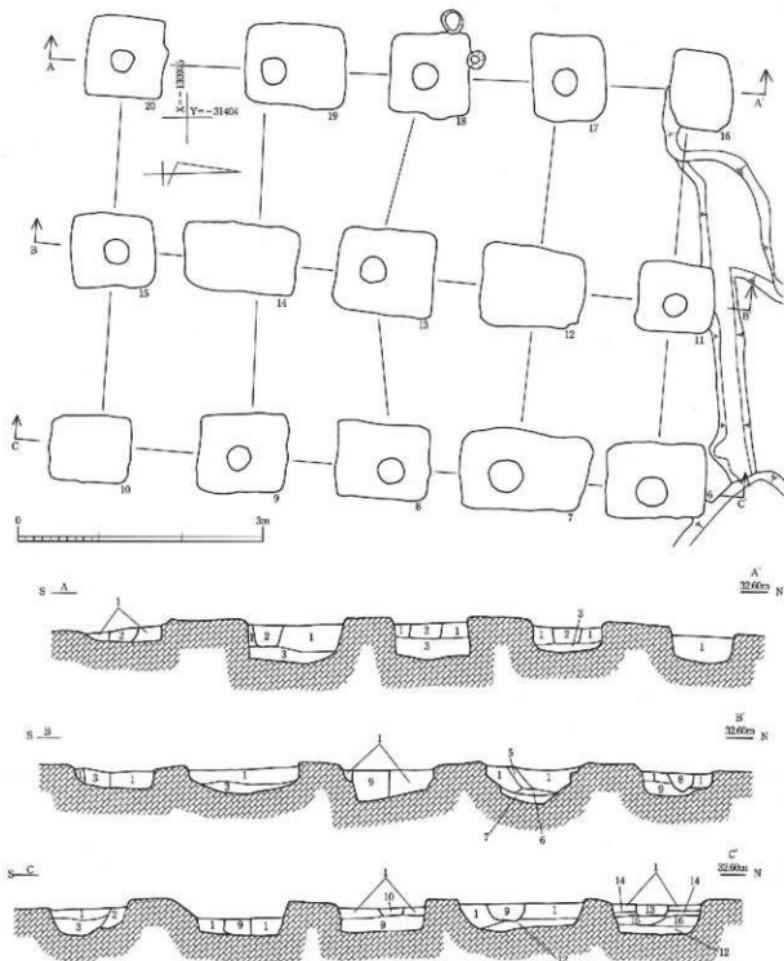
3 古墳時代

3号竪穴住居（第10図）K 7-1-E15-j8,9、調査区南西で検出された竪穴住居である。南側は削平を受け遺構は残存せず、また東端は擾乱によって切られている。壁溝が周回しないため正確な規模は不明であるが、北側壁溝に隣接して存在する不整形の土坑や柱穴の配置から推定すると、一辺約4mの方形住居に復元できよう。柱穴は128、132の2カ所が確認されている。128の柱穴の平面形は円形で直径は0.3m、残存する深さは0.2mを測り、直径0.12mの柱痕も検出した。また、土師器が少量出土している。132の柱穴の平面形は円形で直径は0.35m、残存する深さは0.16mを測り、直径0.13mの柱痕も検出した。柱穴間の距離は2.2mであり、柱穴の埋土は10YR4/4褐色土である。このほか、壁溝に接して不整形の土坑を検出している。幅0.33m、深さ0.1mの隅丸方形形状を呈する。埋土は10YR5/6黄褐色土である。中心には土師器甕が埋置されている。周間に焼土が広がることから、かまと推定される。中心の甕は遺存状況が悪く、図化しえなかった。またそのほか須恵器も少量出土しているが小片で図化はしえない。古墳時代後期の遺構であると考えられる。

4号竪穴住居（第11図）K 7-1-E15-j8、調査区南西部、3号竪穴住居の東側に隣接して検出された竪穴住居である。上部が大きく削平を受け、壁溝の一部が残存するにすぎず、全体像は復元しえない。北側の壁溝が3.6m残存しているので、それ以上であることは確実である。柱穴は確認されていない。壁溝から、土器（6）が出土している。（6）は甕の底部である。底面は平坦で底部径は4.4cm、残存器高は2.5cm、器暈は二次被熱の結果風化が進み、調整は不明である。焼成は良好、胎土は密。色調は外面が10YR5/6明赤褐色、内面が10YR7/4にぶい黄橙色、断面が7.5YR4/2灰褐色。外面の色調にみられる赤みの強さは、二次被熱による赤変の結果であり、この赤変は底部下面まで及んでいる。



第11図 1区 4号竪穴住居平面図・断面図（S=1/60）・出土遺物実測図（S=1/4）

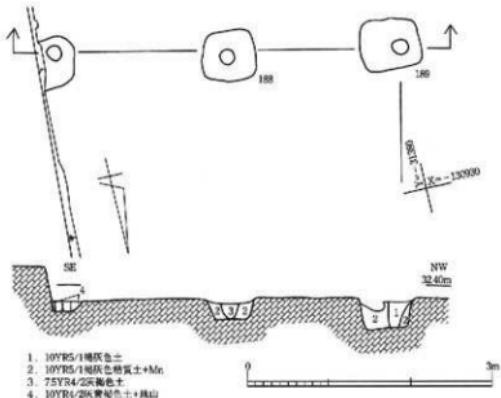


第12図 1区 5号掘立柱建物平面図・断面図 (S=1/60)

1. 10YR6/6暗褐色土+Mu
2. 75YR5/6明褐色土+緑20%
3. 75YR5/6明褐色土+7.5YR4/2暗褐色土
4. 75YR4/3暗褐色土+7.5YR4/2暗褐色土
5. 75YR6/6暗褐色土
6. 75YR6/6明褐色土+7.5YR4/4褐色土
7. 75YR6/6明褐色土+緑20%
8. 75YR5/6明褐色土+緑20%
9. 75YR6/6明褐色土+7.5YR4/2暗褐色土
10. 75YR6/6明褐色土+7.5YR4/2暗褐色土+緑
11. 75YR5/6明褐色土+7.5YR4/4褐色土+
12. 75YR5/6明褐色土
13. 75YR4/4褐色土
14. 75YR6/6明褐色土+緑10%
15. 75YR4/2暗褐色土
16. 75YR5/6明褐色土+7.5YR4/4褐色土+緑10%

4 古代から中世

5号掘立柱建物 (第12図) K 7-1-E15-h,g·1、K 7-1-E-14-g,h·10で検出された掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間の総柱建物である。柱間寸法は桁行1.5~2m、梁間2.3m~2.5mで、桁行長7m、梁間長5mを測り、床面積は約35m²である。主軸の方向はN-5°-Eで、検出面の標高は32.2mを測る。柱穴は隅丸長方形の掘方を呈し、長辺が0.8~1.6m、短辺0.8m~1.1mを測り、深さは0.3m~0.4mを測る。また直径0.27m~0.46mの柱痕跡を検出している。遺物は柱穴から須恵器や弥生土器が出土したが、いずれも小片のため図化しない。



第13図 2区 6号掘立柱建物平面図・断面図 (S=1/60)

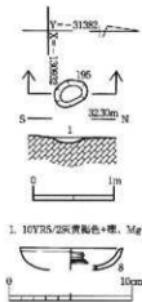
6号掘立柱建物 (第13図)

K 7-1-E14-d8,9で検出された掘立柱建物である。2間以上の掘立柱建物である。柱間寸法は2.15mを測り、主軸の方向はE-14°-Sで、検出面の標高は32.3mを測る。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し、長辺0.64m~0.75m、短辺0.6mを測り、深さは0.14~0.3mを測る。また直径0.18mの柱痕跡を検出している。遺物は掘方から須恵器片と

弥生土器が出土したが、いずれも小片のため図化しない。

7号掘立柱建物 (第14図) K 7-1-E15-i 8,j7,8で検出された掘立柱建物である。桁行5間以上、梁間2間以上の建物である。柱間寸法は桁行で1.6m~1.8m、梁間で1.2m~1.6m、主軸の方向はN-66°-Wで、検出面の標高は32.5mを測る。柱穴は一辺約0.6の隅丸方形の掘方を呈し、深さは0.06m~0.4mを測る。また直径0.1m~0.2mの柱痕跡を検出している。遺物は柱穴290から黒色土器(7)が出土した。口縁は内湾しながら立ち上がり、内面の口縁部直下には一条の沈線を施す。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施し、底部にまで及ぶ。高台は断面逆台形の貼り付け高台であり、やや粗雑である。復元口径15.4cm、残存器高6cmで、色調は外面が7.5YR3/1黒褐色、内面と断面が10YR3/1黒褐色である。焼成は良好、胎土は密である。10世紀の所産であろう。

小穴195 (第15図) K 7-1-E14-d 9で検出された小穴である。平面は直径0.3mのほぼ円形、深さは0.04mで、断面は浅い皿状を呈する。(8)は瓦器小皿の小片である。復元口径8.4cm、残存器高1.8cmで、残存率は20%である。色調は内外面・断面のいずれもN4/灰色土で、焼成は良好、胎土は密である。小型で浅く、内面にヘラミガキを施す。13世紀後半の所産であろう。



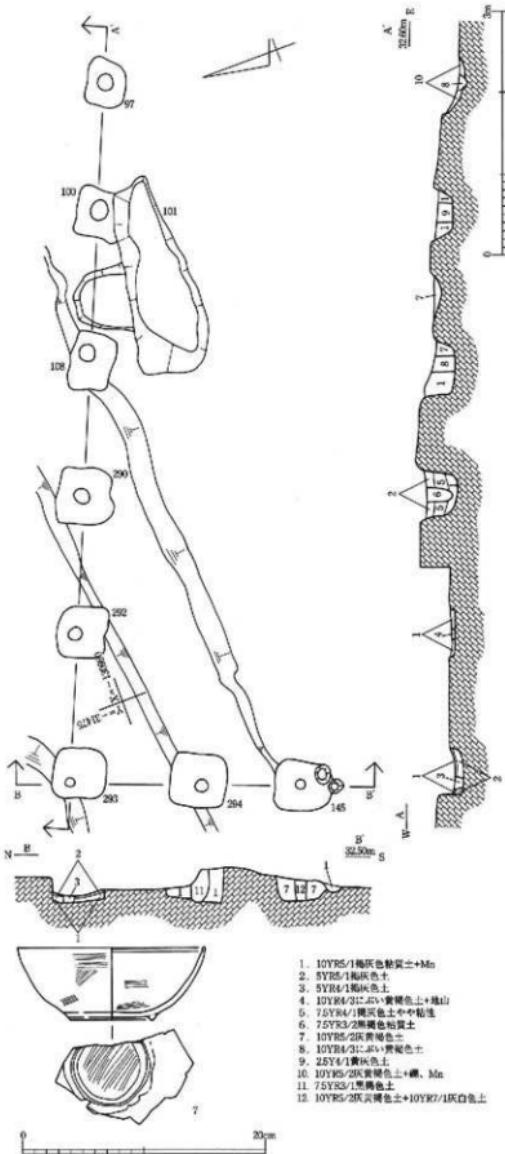
第15図 2区 小穴195平
面図・断面図 (S=1/60)

出土遺物実測図

(S=1/4)

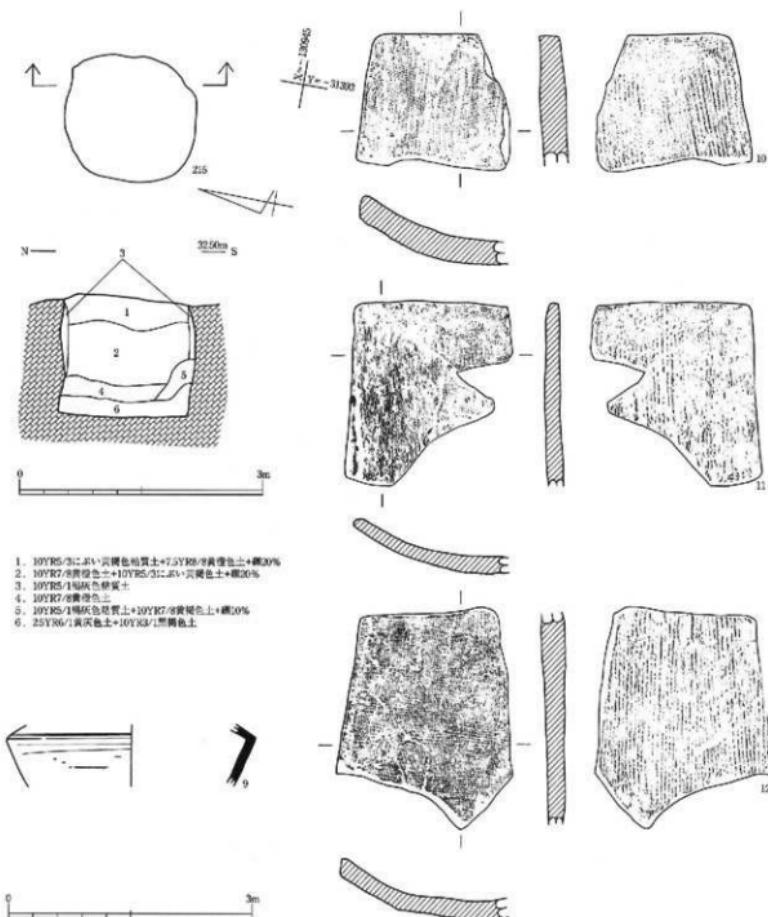
土坑215 (第16図)

K 7-1-E14-e10で検出された土坑である。平面は一辺約1.6mの隅丸方形、深さは1.5mで、底面は平らである。(9)は須恵器の壺である。肩部がわずかに残存するのみである。色調は外面が7.5Y4/2灰オリーブ色、内面がN7/0灰白色、断面はN8/0灰白色であり、焼成は良好で胎土は密である。8世紀前半の土器と考えられる。(10)～(12)は平瓦である。いずれも凸面は平行縄目タタキ、凹面には布目が残る。(10)の色調は凸面が2.5Y8/2灰白色、凹面が2.5Y6/1黄灰色、断面が7.5YR7/4にぶい橙色で、



第14図 1・3区 7号掘立柱建物平面図・断面図 (S=1/60) ·
出土遺物実測図 (S=1/4)

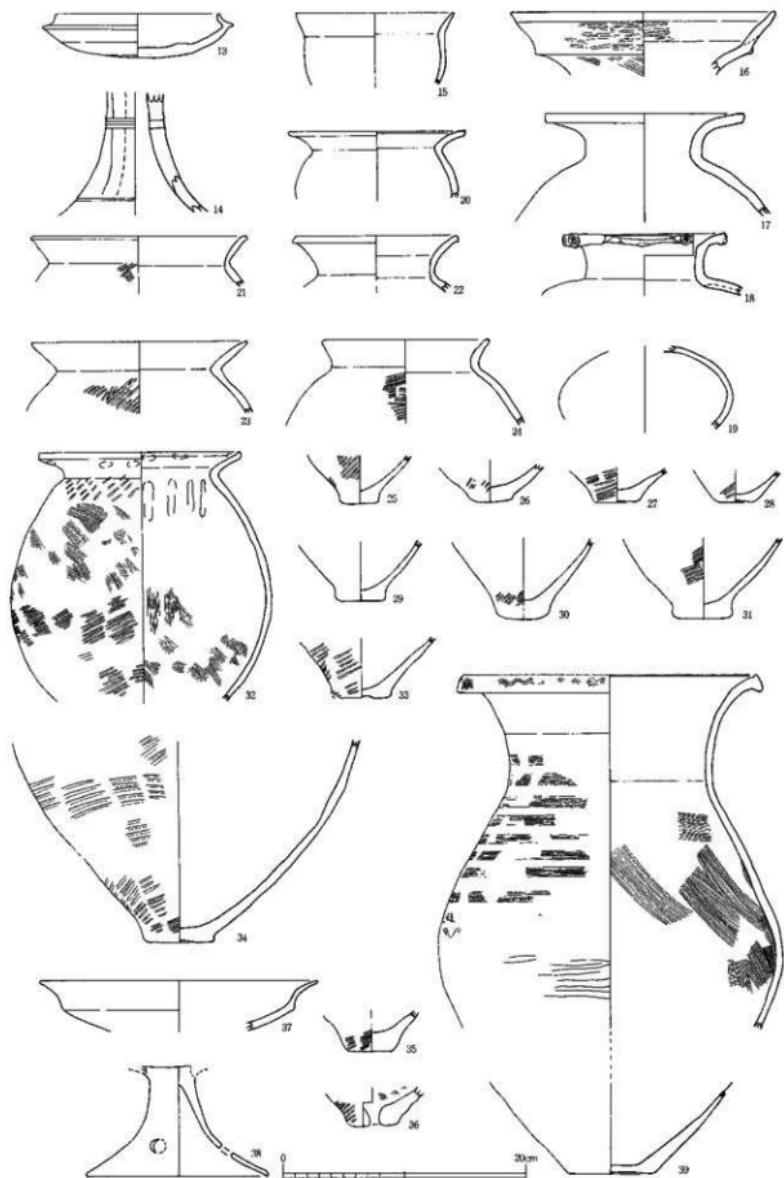
焼成は良好、胎土は密である。(11) の色調は凸面と凹面が2.5Y8/1灰白色、断面が2.5Y7/2灰黄色で、焼成はやや不良、胎土は密である。(12) の色調は凸面、凹面、断面ともにN8/0灰白色で、一部にN5/0灰色の部分が黒斑状に広がる。焼成は良好で胎土は密である。(10) ~ (12) はいずれも奈良時代の所産であろう。



第16図 2区 土坑215平面図・断面図 ($S=1/60$)・出土遺物実測図 ($S=1/4$)

5 包含層出土遺物（第17・18図）

(13) は須恵器の坏身である。口径が13.6cmに対し、器高は3.7cmと低い。色調は内外面・断面のいずれもN7/0～N8/0灰白色で、焼成は良好、胎土は密である。(14) は須恵器高壺の脚部である。遺存状況が悪く全体像は復元しえないが、二段の三方透孔を施していると考えられる。(13)・(14) はいずれも6世紀の後半のものであろう。(15) は鉢である。復元口径12.8cm、残存器高は6cmである。口縁部直下にタタキの痕跡がごくわずかに観察できたが、風化が激しく、図化には至らなかった。焼成はやや不良で胎土もやや粗い。色調は内外面・断面のいずれも、10YR8/1灰白色を呈する。(16) は二重口縁壺の口縁部である。外に向かって開く1段目の擬口縁の上部に2段目の口縁を接合している。口縁端部は平坦にしているが、厚みが増すわけではない。口縁内部と、外面の2段目には丁寧なヘラミガキを施し、外面の1段目はハケメが明瞭である。復元口径21.7cm、残存器高5.2cm、焼成は良好で、胎土も密である。色調は内外面とともに、10YR7/3にぶい黄橙色、断面は10YR3/1黒褐色である。(17) は広口壺で口頸部のみ残存する。頸部は短く垂直に立ち上がり口縁部に向かって緩やかにひらく。外面の一部にはハケメの痕跡が観察できたが、図化はしえなかった。口径は16cm、残存器高は9cm、焼成は良好で胎土は密。色調は外面が10YR8/3浅黄橙色、内面が10YR7/1灰白色、断面が10YR4/1褐灰色を呈する。(18) は広口壺で口頸部のみ残存する。頸部はやや外向きに短く立ち上がり、口縁部が水平に開く。口縁端部に粘土を貼り足して端面を広げた上で、円形浮文を貼り付ける。口縁部の一部にU字状の打ち欠きがある。なお調整は内外面ともに不明。口径は13.5cm、残存器高は4.5cm、色調は内外面・断面のいずれも10YR8/2灰白色であるが、口縁から頸部にかけて一部に二次被熱による赤変を認める。焼成は良好で胎土は密である。(19) は壺である。胴部のみで頸部・底部は欠損する。強くふくらむ胴部に、長い頸部のとりつく形の壺であろう。残存器高は6.8cm。焼成は良好で胎土は密、色調は外面が2.5Y8/1灰白色、内面と断面は2.5Y6/1黄灰色である。(20) は小型の甕の口縁部である。口縁端部はややつまみ上げている。胎土に直径が最大2mm程度の白色砂粒を3%程度含んでいる。二次被熱の痕跡が顕著で、器壁が著しく荒れており、調整は不明。復元口径14.4cm、残存器高4.5cm。焼成は良好で胎土も密、色調は外面が10YR7/3にぶい黄橙色～10YR5/2灰黄色、内面が2.5Y7/3浅黄色～2.5Y4/1黄灰色を呈する。(21) は甕の口縁部である。口縁部は短く外に開き、口縁端部は丸くおさめる。外面にタタキ目の痕跡が残るも、表面は風化が激しい。復元口径17.4cm、残存器高4cm。焼成はやや不良、胎土は密、色調は外面が7.5YR8/3浅黄橙色、内面と断面が10YR8/1～10YR8/2灰白色である。(22) は甕の口頸部である。口縁部が外反し、端部には平坦面をつくる。二次被熱の痕跡が若干認められる。復元口径13.3cm、残存器高4.6cm、焼成は不良で、胎土は密、色調は内外面・断面のいずれもが2.5Y8/1～10YR8/1灰白色である。(23) は甕の口縁部である。胴部にはタタキを施し、胴部と頸部の屈曲部は横方向のナデを施す。内面口縁部と肩部の境に稜を持ち、肩部にはヘラケズリが施される。口縁端部も若干つまみ上げるが、いずれも粗雑である。復元口径17.6cm、残存器高6.2cm、焼成はやや不良で、胎土はやや粗く最大4mmの砂粒を5%程度含む。色調は外面が2.5Y8/2灰白色、内面が2.5Y3/1黒褐色、断面は部分によって異なるが、内外面のいずれかと同じである。(24)



第17図 包含層出土遺物実測図 ($S=1/4$)

は甕の口縁部である。復元口径13.8cm、残存器高7cmである。胴部にはタタキを施すが、その他の調整は不明である。焼成は良好、胎土はやや粗で、最大3mmの礫を10%程度含む。色調は外面が7.5YR8/2灰白色、内面が7.5YR8/3浅い黄橙色、断面が7.5YR7/2明褐色である。(25)は甕の底部である。底部の復元径は3.2cm、残存器高は4cmである。外面にはタタキが施される。色調は内外面ともに5YR8/4淡橙色であり、一部に黒斑がある。焼成は甘く、胎土は密ながらも最大で径4mmの砂粒を5%含んでいる。(26)は甕の底部である。底部径は3.7cmで、底面は若干丸みを帯びる。残存器高は2cmで、外面にタタキ目の痕跡を認める。二次被熱を認め、赤変が底部下面に及ぶ。胎土は密で焼成は良好、色調は内面と断面が7.5YR8/3浅黄橙色などに対し、外面が7.5YR7/6橙色でやや赤みを帯びるが、これは二次被熱の影響であろう。(27)は甕の底部である。底部径は3.4cmで、いわゆる輪積技法によると思われる明瞭な窪みが観察できる。残存器高は3cmで、外面にはタタキを施す。二次被熱の結果、底部下面が赤変する。焼成は良好、胎土は密、色調は外面が二次被熱により2.5YR5/3にぶい赤褐色を、内面が10YR7/1灰白色、断面が2.5Y4/1黄灰色を呈する。(28)は甕の底部である。底部径は3.1cmで、底面には若干の窪みを認める。残存器高は2.4cmで、外面にはタタキを施す。二次被熱が認められ、底面が赤変する。焼成は良好、胎土は密で、色調は内外面・断面がいずれも7.5YR7/3~8/3浅黄橙色を呈する。(29)は甕の底部である。底部はごくわずか丸みを帯びているが、平面上に設置した際に不安定になるほどではない。底部径は4cm、残存器高は4.7cm。底部に近い外面に若干のタタキ目を認めるが、器壁の剥落が激しく、図化しえなかった。焼成は良好、胎土は密、色調は外面が7.5YR8/6浅黄橙色、内面は7.5YR8/2灰白色、断面は7.5YR8/6浅黄橙色~7.5YR8/2灰白色である。二次被熱を認め。(30)は甕の底部である。底面はやや丸みを帯びており、平面上に設置した場合不安定になる。底部径は4cm、残存器高は6.4cmで、外面にはタタキを施している。二次被熱の痕跡が顕著で、赤変は底部に近いほど激しく、底面にまで及んでいる。焼成は良好、胎土は密、色調は内外面・断面のいずれも7.5YR7/3にぶい橙色である。(31)は甕の底部である。底面はやや丸みを帯びており、平面上に設置した場合不安定になる。底部径は5cm、残存器高は6.5cmである。外面にタタキが施されているのは確認できるが、どこまで及んでいるかは壁面の風化のために判然としない。二次被熱の痕跡が認められ、内面には炭化物の付着も確認できる。焼成は良好、胎土は密、色調は内外面・断面のいずれも10YR8/1灰白色である。なお底部の作りが第8図(2)と非常によく似ている。(32)は甕である。口径は16.4cm、残存器高は20.5cmで残存率は40%である。胴中央付近がもっとも膨らみ、口縁端部はややつまみ上げるが調整は粗く凹凸があり、内面の下部はハケ調整で、胴部と口縁部の境界はユビオサエで仕上げている。外面胴下半には明瞭なタタキ目が残るが、上半はハケメ、口縁部と胴部の境界はタタキ目が認められる。焼成はやや不良で胎土もやや粗く、色調は内外面共に10YR8/1灰白色で断面は7.5YR5/8明褐色である。(33)は甕の底部である。底面はほぼ平坦ながら、若干の窪みを持つ。外面にはタタキを施す。底部径は5.0cm、残存器高は4.9cm、焼成は良好で胎土は密である。色調は外面が10YR7/3にぶい黄橙色、内面が2.5Y8/2灰白色、断面が7.5YR5/6明褐色である。(34)は甕の底部である。底面には輪積技法と考えられる明瞭な窪みがあり、平面上に設置し

た場合安定する。底部径は5.8cm、残存器高は16.5cm。外面にはタタキを施すが、内面の調整は剥落のため不明。二次被熱の痕跡が認められる。焼成は良好、胎土は密、色調は内外面ともに7.5YR8/2灰白色、断面は10YR7/6明黄褐色を呈する。(35)は壺の底部である。底面は平坦で調整の有無は不明。外面にはタタキを施し底部直上にまで及んでいる。底部径は3.7cm、残存器高は3.6cm、色調は内外面、断面ともに、2.5Y8/3淡黄色～2.5Y8/2灰白色である。焼成は良好なようであるが、二次被熱も認められ、器壁の剥落は激しい。(36)は有孔鉢の底部である。外面はタタキを施され、内面にはハケメを施す。底部に内側から外側に向けて焼成前穿孔が施される。底部下面是丸みを帯び、平面上に置くと不安定となる。底部の復元径は3cm、残存器高は3.1cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が10YR8/3浅黄橙色、断面が2.5Y8/3淡黄色で、内面が10YR3/1黑褐色であるが、これは黒斑による。(37)は高坏の坏部である。坏部下半が外傾し、上半は外反する。器壁は剥落が著しく調整は不明。復元口径19.8cm、残存器高4.6cm。焼成はやや不良ながら胎土は密、色調は内外面、断面のいずれも7.5YR7/1～7.5YR8/2灰白色である。(38)は高坏の脚部である。坏部は欠損し、脚部も3分の1を欠く。調整は表面の風化が激しく不明である。円形の透孔を3カ所にもつ。脚部の上端は粘土でふさがれており、脚部を形成したのち坏部を挿入する、いわゆる挿入付加法によるものと考えられる。脚部内面には絞りの痕跡が若干認められる。脚部の復元径14.9cm、残存器高9cm、焼成は良好であるが、胎土はやや粗く最大5mmの砂粒を5%含む。色調は内外面・断面のいずれも10YR7/3にぶい黄橙色である。(15)～(38)は古墳時代初頭の所産であろう。(39)は弥生中期の広口壺である。頸部から胴部にかけて9条の櫛描直線文、その下部に波状文を施し、口縁端部は上下につまみ、平坦部を作ったところに波状文を施している。胴上半はナデ調整、下半はヘラミガキを施し、内面はハケ調整である。復元口径24.0cm、底部径7cm、推定器高は約40cm。焼成は良好、胎土は密で、色調は外面が7.5YR8/3浅黄橙色、内面が7.5YR7/4にぶい橙色、断面が7.5YR7/2明褐灰色である。第18図(40)は盛土中から出土した石包丁である。残存長10.0cm、幅3.1cm、厚さ0.45cm、残存率90%である。色調は暗灰色で、黒色粘板岩製である。

(伊藤文彦)



第18図 石製品実測図 (S=1/2)

② 平成17年度調査（05016）

1 概観

本年度の調査では、調査区の南北は大きく搅乱を受けていたが、比較的搅乱の少ない中央部一帯を中心に、竪穴住居、溝状遺構、土坑などを検出した。主な遺構・遺物は後で詳述するので、その他の遺構の概観を述べる。

遺構面は基本的に1面で、標高は32.4mである。1区では、調査区の北西隅から西端に沿って、自然地形の谷にあたる落ち込みが検出された。この谷はX=-130962ラインで現在宅地となっている台地の外側へ回りこんでいくものと思われる。谷地形の上面では、表土・旧耕土・整地層を順に除くと薄い包含層があり、その下の遺構面は地山の1面である。2区では、包含層上面と地山面の2面、遺構面が確認された（K 7-1-E15-c1,2区）。

弥生時代では調査区の北端K 7-1-E15-c 4区において、後述する溝72、溝74の約3.5m東で、溝108と溝111を検出した。いずれも幅約0.15m、深さ0.05mで、南側を搅乱に切られ、北側は調査区外へと延びて、検出した長さは約0.5mである。溝の埋土からは弥生土器の破片が出土したが、細片のため図化には至らなかった。同じく北壁にかかるて検出された73は深さ約0.15mの掘り込みだが、北側が調査区外、南側は搅乱による破壊のため、0.5×0.7mを検出したのみで平面形はわからない。埋土から弥生土器と思われる土器の細片が出土した。また、K 7-1-E15-c 4区の土坑67、68、75、およびK 7-1-E15-d 4区の土坑76、91にも弥生～庄内・布留式併行期かと思われる土器細片が含まれていたが、風化が激しく、はっきりした年代はわからない。

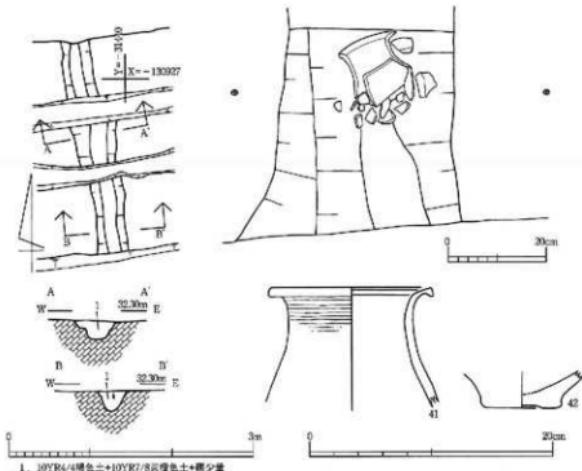
古墳時代ではK 7-1-E16-d 1区～K 7-1-E16-g 1区にわたって前述（1区）の谷がやや東に広がり、0.5mほど落ち込んだところで一度平坦面ができている。この平坦面に溝1が掘り込まれていた。幅0.5m、深さ0.1m、埋土は1層（7.5YR4/1褐色粘質土）で、古墳時代の遺物が出土した。K 7-1-E15-d 2区の土坑138は一辺0.5m、深さ0.25mを測る方形の土坑である。埋土は10YR3/2黒褐色土、7.5YR7/8黄橙色粘質土、10YR3/2黒褐色土に7.5YR7/8黄橙色粘質土が混じった土の3層で、土師質土器の細片が出土したが、時期の特定には至らなかった。

その他、調査区全体から大小の土坑を検出したが、年代を特定できるものはなかった。また、いくつかの土坑では柱の痕跡を確認したものの、掘立柱建物跡を認識することはできなかった。

2 弥生時代

溝74（第19図）K 7-1-E15-c 5区で検出されたほぼ南北に直線で延びる溝である。北側は調査区外へと続き、南側は搅乱に切られており、検出長2.2mである。後述するように溝86と同一の溝である可能性が高い。幅0.3～0.6m、深さ約0.2mで、断面形はU字型の部分と平底の部分があり、西辺には一部階段状の平坦面がある。埋土は一層で10YR4/4褐色土に10YR7/8黄橙色土と疊少量が混じる。搅乱に切られた南端付近で、底面からやや浮いた状態で弥生土器の壺（41）、底部（42）などが出土した。（41）は壺の口縁である。口径13.2cm、残存器高9.7cmを測る。砂を少量含むが密な胎土で、

焼成は甘い。色調は外面・断面ともに7.5YR8/4浅黄橙を呈する。外面は口縁の直下約3cmまで横方向に幅の広いミガキが施されるが、それ以下は器壁が剥離していて不明。口縁はナデ仕上げである。内面は摩滅が激しいが、一部剥いナデが見られる。(42)は甕の底部である。平底で、中心が僅かにくぼんでいる。復元底径5.8cm、残存高2.9cm。径3~4mmの砂を少量含む胎土で、焼成はやや甘い。色調は外面が10YR4/2灰褐色、内面・断面が10YR4/1褐灰色である。外面は底面まで全面ナデで仕上げられている。内面は摩滅しており調整不明である。



第19図 2区 溝74平面図・断面図 (S=1/60)・遺物出土状況図 (S=1/10)・出土遺物実測図 (S=1/4)
 溝86(第20図) K 7-1-E15-e 4区で検出されたほぼ南北に直線で延びる溝である。南北を搅乱に切られ、検出長は5.3mである。8号竪穴住居跡の壁溝と柱穴101にそれぞれ切られる。その他いくつかの土坑と切りあい関係を持つ。幅0.2~0.3m、深さ約0.1~0.2mを測り、断面は逆台形である。理土は一層で10YR4/4褐色土に10YR7/8黄橙色土と礫少量が混じる。弥生土器と思われる甕や、高壙または小型器台の破片が含まれていたが、いずれも細片で図化には至らなかった。この溝86は前述した溝74のほぼ延長上にあり、埋土が同じで出土遺物の年代も似通っていることから、両者は同一の溝である可能性が高い。この場合、溝の複元長は南北約17mを測る。

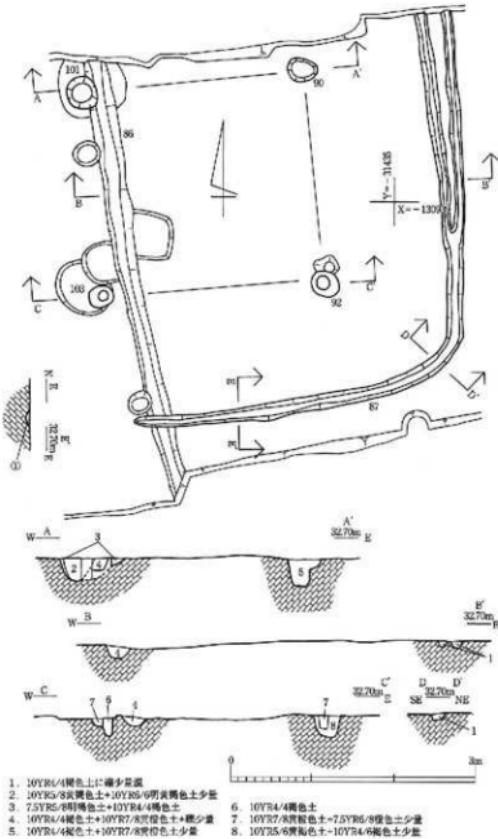
3 古墳時代以降

8号竪穴住居(第20図)調査区の中央付近、K 7-1-E15-e 4区で検出された方形竪穴住居である。削平のためか竪穴壁は残らず、L字形の壁溝のみが検出された。主軸の方向はN-3°-W、検出面の標高は32.4mである。壁溝は北端を搅乱に切られ、西端は溝86との切りあい部分から西に約0.2mのところで途切れている。壁溝は幅0.1~0.2mで、X=-130939ライン付近で、幅0.1~0.2mの2本の

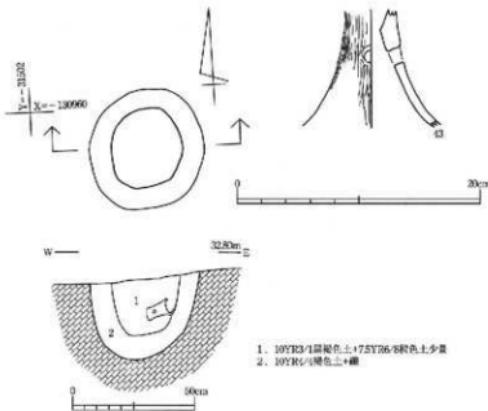
溝に分かれる。深さは0.05~0.1m。埋土は10YR4/4褐色土に礫が少量混じった一層で、庄内式併行期の土器の細片を含む。住居の内部からは、主柱穴とみられる90・92・101・103を検出した。直径0.3~0.4m、深さ0.2~0.3mの円形で、92と103には柱の痕跡が残っている。柱穴間の距離は2.5~2.8mである。埋土はいずれも黄褐色土~褐色土の一層で、遺物は含まれていなかった。

土坑3 (第21図) 調査区西端のK 7-1-E16-g 1区で検出された、円形の土坑である。一辺0.5m、深さ約0.3mを測る。底部は浅い楕型を呈し、壁面東はほぼ垂直にたちあがり、西側はやや湾曲してたちあがる。埋土は①10YR4/4褐色砂礫土と②7.5YR6/8橙色土が少量混じる10YR3/1黒褐色土の2層である。①の中から、庄内式併行期の高壙脚部が出土した。高壙(43)は、杯部・脚端部欠損のため全体の形はわからない。透孔は4方向で、径1.2cm~1.3cmの円形である。残存高は最大9.5cmを測る。細かい砂のほか径5mm程度の長石粒を少量含む胎土で焼成良好。色調は外面が7.5YR8/2灰白色、内面と断面が7.5YR7/6橙色である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。

土坑71 (第22図) K 7-1-E15-c 5区で検出された土坑である。南半分と北端の一部を搅乱に切られ、西側は溝72に切られており、平面形ははっきりしないが、径約0.8mの円形であったと思われる。深さは0.3mを測る。壁は斜めで平底、断面逆台形。埋土は10YR4/6褐色土に7.5Y7/8 黄色土が少量混じった1層で、遺物を多く含む。遺物は庄内式併行期の高壙、底部、鉢などである。(44)~



第20図 2区 8号竪穴住居・溝86平面図・断面図 (S=1/60)



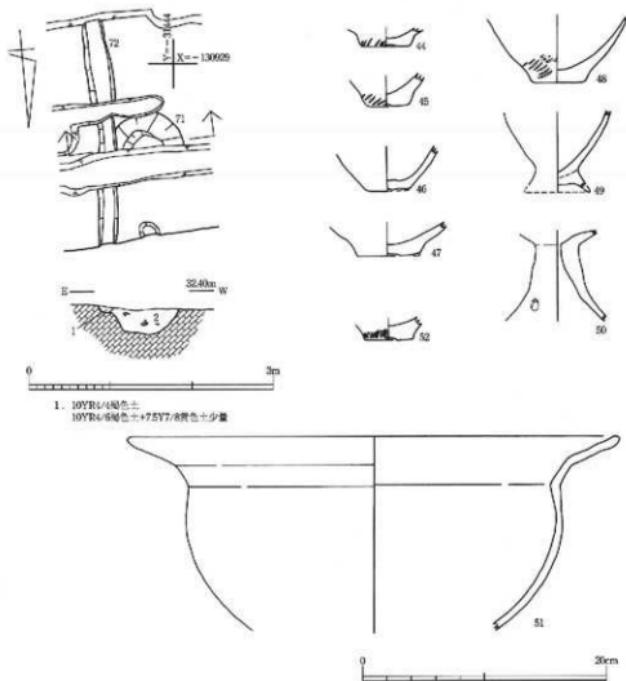
第21図 1区 土坑3平面図・断面図 (S=1/60)

出土遺物実測図 (S=1/4)

甘い。色調は外面と断面が10YR6/1褐灰色、内面が10YR6/2灰黄褐色で、二次被熱による赤変が底面にまで及ぶ。外面には3条/cmの斜め方向のタタキ目が認められる。底面はナデ仕上げ、内面にも弱いナデを施す。(46)は平底で、底面は剥落が激しく形がはっきりしない。底径3.6cm、残存器高3.1cm。砂を含むが比較的密な胎土で、焼成良好。色調は外面と断面が7.5YR6/1褐灰色、内面が7.5YR4/1褐灰色を呈する。外面はナデ調整、内面は一部にハケメが見られるが、図示しえなかった。(47)は平底で、中心がわずかにくぼんでいる。底径5.1cm、残存器高は2.6cm。砂を少量含む密な胎土で、焼成は甘い。色調は外面が7.5YR6/6橙色、内面と断面が10YR3/1黒褐色である。内外面とも剥離が著しいが、わずかにナデが認められる。(48)は平底である。底径4.5cm、残存器高5.2cm。色調は外面が2.5Y7/4浅黄色、内面と断面が10YR4/1褐灰色だが、外面は大部分二次被熱のため赤変している。外面には3条/cm程度の不規則なタタキ目が見られる。底面はナデ、内面は不整方向の工具ナデで仕上げる。台付鉢(49)はV字型の体部で、底部に粘土を貼りつけて外反する高台を作り出す。外面胴部と高台の接合部には強いユビオサエの痕跡が見られる。高台端部は欠損している。残存器高は6.5cm。胎土は密で、焼成はやや甘い。色調は外面が5YR6/6橙色、内面が7.5YR5/6明褐色、断面は10YR3/1黒褐色である。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明。高壺(50)は壺部と脚端部を欠いており、全体の形はわからない。脚部の半ばよりやや下方に透孔が5カ所あるが、形のわかるものは1つのみで、これは径1.2cmの円形である。ただし、透孔の間隔や高さは一定しない。残存器高は7.1cmである。粗砂を多く含む胎土で、焼成は良好。色調は内外面が2.5Y8/1灰白色、断面が10YR6/1褐灰色を呈する。外面は摩滅著しく調整は不明、内面はナデで仕上げている。鉢(51)は口縁部径40.6cmを測る、大型の鉢である。残存器高は15.8cm。口縁端部の破片と、胴部の破片があり、直接には接合しなかったが、胎土等から同一個体とした。緩やかに膨らんだ胴部からやや外反ぎみに口縁部が立ち

(48)は壺の底部である。(44)は、輪積成形の平底である。底径3.9cm、残存器高1.3cm。粗砂を多く含む胎土で、焼成も甘い。色調は内面が10YR5/1褐灰色、外面と断面が10YR8/4浅黄橙だが、二次被熱のため全体が赤変している。外面には2~3条/cmの粗く不規則なタタキ目が見られる。底面はナデ仕上げ、内面は剥離しているが、一部ユビオサエのような痕跡が見られる。(45)は平底で、中心がわずかにくぼんでいる。底径3.7cm、残存器高2.2cm。粗砂を含む雑な胎土で、焼成はやや

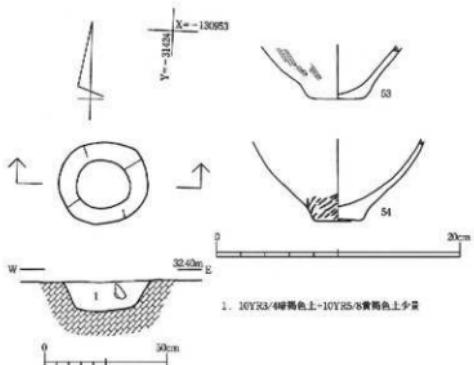
あがり、さらに外側に屈曲して長く伸びる。胴部下半は欠損しているが、直線的にすぼまり小さな底部につながると思われる。粗砂を多く含む胎土で、焼成は甘い。色調は外面が10YR8/3浅黄色、内面が2.5Y8/3浅黄色、断面は場所によって異なるが、内外面のどちらかと同じである。外面は全体に横方向のナデを施す。内面は剥離著しく調整不明。



第22図 2区 土坑71・溝72平面図・断面図 (S=1/60)

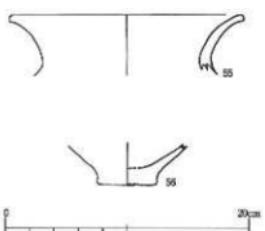
出土遺物実測図 (S=1/4)

溝72(第22図) K 7-1-E15-c 5区で検出した溝である。ほぼ南北に走り、北側は調査区外へ続き、途中2カ所と南側を搅乱に切られている。また、東辺の一部が土坑71を切る。幅約0.2~0.3m、深さ0.1mを測り、断面は浅いU字形である。埋土は10YR4/6褐色土に7.5Y7/8黄色土が少量混じる1層である。庄内式併行期の土器片が10点ほど出土しているが、図化できたのは底部(52)のみである。(52)は中心がくぼんだ平底で、甕の底と思われる。底径3.9cm、残存器高は1.8cm。密な胎土で焼成も良好である。色調は外面が7.5YR6/1褐色、内面が7.5YR6/6橙色で、断面は場所によって異なるが、内外面のどちらかと同じである。4条/cm単位のやや細かいタタキが施され、外面は一部弱いナデ、底面にもナデが見られる。内面は摩滅が激しく調整不明である。



第23図 2区 小穴114平面図・断面図 (S=1/60)
出土遺物実測図 (S=1/4)

は、底径3.6cm、残存器高は6.8cm。胎土は粗く2～5mmの砂粒を5%含み、焼成は不良。色調は内外面共に10YR8/2灰白色、断面は10YR4/1褐灰色である。外面にはタタキ目が認められるが、剥離は著しく、内面は調整不明である。



第24図 包含層出土遺物
(S=1/4)

4 包含層出土遺物 (第24図)

(55) は壺の口縁である。口径19cm、残存器高5cm。胎土は密だが径1～3mmの砂を少量含み、焼成はやや甘い。色調は外面が10YR8/4浅黄橙色、内面が2.5Y8/3淡黄色、断面が10YR6/3にぶい黄褐色であるが、内外面ともに一部褐灰色に変色している。内外面ともに縦横のハケメが見られる。口縁端部はヨコナデで仕上げている。(56) は甕の底部である。底径4.9cm、残像器高3.4cm。胎土は密だが焼成は甘い。色調は外面と断面が10YR7/6明黄褐色、内面が2.5Y8/4淡黄色である。全体に摩滅が著しいが、底部のくびれ外面にナデが残っている。いずれも弥生時代中期後半の所産であろう。

(高田麻美)

第4章　まとめ

本調査においては、弥生時代中期から古墳時代後期の竪穴住居や、平安時代の掘立柱建物などを検出した。とくに、平安時代にくだる掘立柱建物は、その主軸が正方位と一致しないもので、これまで禁野本町遺跡の過去の調査によって検出されている掘立柱建物とは様相を異なる。そこで、本調査とこれまで調査成果から、百済寺との関連を視野に入れつつ禁野本町遺跡の古代における集落の展開を追い、また文献の検討もあわせて行って、禁野本町遺跡の歴史的位置を明らかにし、本報告のまとめにかえたい。

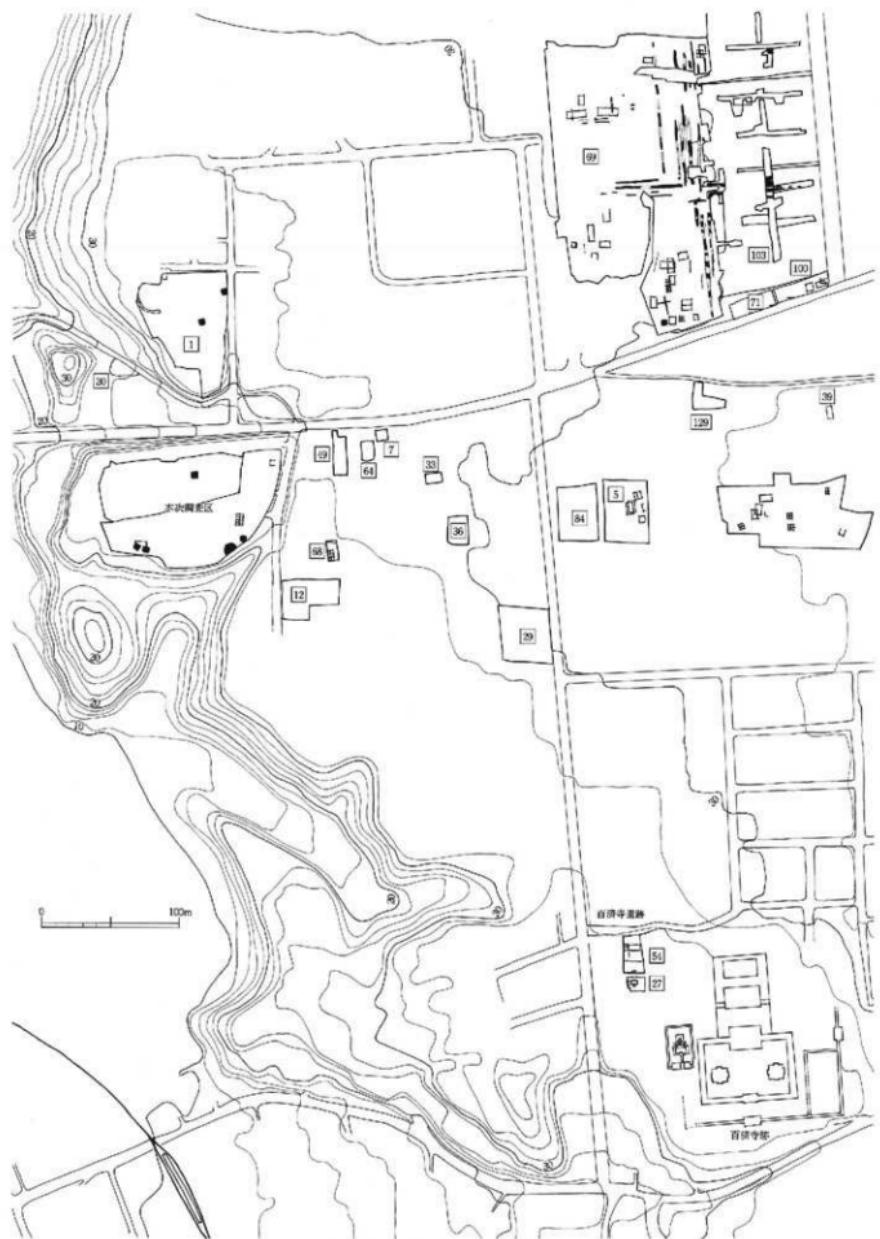
(1) はじめに

「百済寺跡」の本格的な発掘調査が行われたのは1931年のことである。調査は大阪府史蹟名勝天然記念物保存調査會が行い、その成果は大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書第四輯として刊行されている¹¹。この調査において、基本的な伽藍配置が確認されるとともに瓦類を中心として多くの遺物が検出された。調査を担当した岸本準二は、この寺院の創建年代について、薬師寺式の伽藍配置や礎石の形式、また瓦の年代観や出土状況から創建年代は平安時代初期を下限として、奈良時代末期を上限とするとした。一方、文献における百済王氏と交野の特殊な関係や、中宮集落は百済王邸跡という伝承があること、この寺院跡に隣接して百済王神社が存在することなどから、この寺院跡は続日本紀が伝える「百済寺」であると考え、百済王氏の動向からその創建は天平勝宝四年(752)から延暦二年(783)の間と考えた。またその廃絶年代については平安時代中ごろか、遅くとも平安時代末を下らないと想定した。

1964年の大阪府の調査¹²においては、回廊が金堂に取り付く伽藍配置であることが確認されるとともに、複弁六弁蓮華文軒丸瓦をはじめとする飛鳥時代後期(白鳳期)にさかのぼる可能性のある軒丸瓦を検出した。この報告書で藤澤一夫は、調査の成果と『興福寺官務牒疏』、『百済王靈祠廟由緒』、『百済王三松氏系図』といった文献から、白鳳時代に壬辰甫の子孫である船氏による氏寺の建立があったこと、天半年間に百済王敬福とその一族による伽藍整備があり、その際の開基は宣教大師であること、平安時代中期に火災に遭い衰退したこと、などを具体的に述べた。

これらの調査と論考から「百済寺」の創建年代については、「概ね8世紀後葉とするのが一般的」¹³と認識されており、出土している飛鳥時代にさかのぼりうる軒丸瓦については、その「前身寺院」であるとされることが多い。あわせて、禁野本町遺跡に関しては「百済王氏の居住地」であるという認識が広がりつつある。

「百済寺跡」が続日本紀に記される「百済寺」であるということが正しいならば、禁野本町遺跡が百済王氏の居住地という可能性は高くなる。そこで、禁野本町遺跡の具体的な展開を整理したうえで、当遺跡と百済王氏の関係を考えてみたい。



第25図 既往調査区位置図

(2) 古代の禁野本町遺跡の展開

上述したように、禁野本町遺跡は百濟寺を造営した百濟王氏の居住集落として考えられつつある。またその根拠としては、103次調査で百濟寺跡の中軸線の延長線に沿って延びる南北道があり、百濟寺跡の北端から古代条里の尺度のほぼ5町に当たる位置で交差する東西道があることなどが挙げられている²⁴⁾。しかし禁野本町遺跡の中心と見られる第103次調査地点と百濟寺はおよそ600mはなれており、また第5次調査地点・第6次調査地点以南と百濟寺の間は調査が進んでおらず、103次地点から百濟寺周辺までが大規模な同一の集落を形成するかどうかはさらに検証をする必要がある(図25)。

そこで、これまでに報告されている掘立柱建物について、その主軸が百濟寺伽藍中軸線より何度ずれているかをグラフにまとめた(表1・図26)²⁵⁾。このグラフによると、禁野本町遺跡の掘立柱建物は百濟寺伽藍中軸線よりもやや東に傾くものが多いものの、そのほとんどが、ずれ幅およそ10°以下の範囲におさまり、百濟寺中軸線と大きくずれないことがわかる。

大きくずれるものは第6次調査のSB-01、SB-07と、本次調査の6号・7号掘立柱建物である。このうち第6次調査のSB-01、SB-07については古墳時代の掘立柱建物と報告されており、百濟寺と無関係である。本次調査で検出した6号・7号掘立柱建物はいずれも東西建物であるが、長軸に直行した方位角はそれぞれN14°E、N24°Eであって、百濟寺中軸線のN4°30'Wとのずれは否めない。百濟寺伽藍中軸線と関連する集落の展開は台地西端まで及んでいないよう見える。

このことをさらに検討するために、詳細な報告がされている調査をとりあげ、掘立柱建物の時期

表1 掘立柱建物主軸方向一覧

遺跡名/調査地点	遺構名	主軸方向	距離(m)	ずれ幅(°)
百濟寺跡	高麗寺式伽藍	N 4° 30' W	0	0
百濟寺遺跡	SB5401	N 1° 0' E	100	5.5
	SB5402	N 2° 0' W	110	2.5
	SB5403	N 1° 20' W	95	3.2
	SB5601		90	5.5
	SB5602		94	5.5
	SB5603		93	5.5
禁野本町遺跡第5次	SB-001	N 5° 33' W	403	-1.4
	SB-002	N 1° 53' W	394	2.6
	SB-003	N 0° 53' W	394	3.8
	SB-004	N 5° 53' W	394	-1.4
	SB-005	N 0° 53' W	388	3.8
禁野本町遺跡第6次	SB-01	N 27° 37' W	373	-23.1
	SB-02	N 1° 7' E	362	5.5
	SB-03	N 1° 27' E	373	6
	SB-04	N 6° 7' E	394	4.8
	SB-05	N 1° 7' E	362	5.5
	SB-06	N 1° 7' E	379	5.8
	SB-07	N 31° 53' W	373	36.4
禁野本町遺跡第6次	その他なし	N 1° 7' E	403	5.8
禁野本町遺跡第6次	SB5601	N 4° 53' E	464	9.4
禁野本町遺跡第6次	佐藤寺1	N 5° 30' W	718	-1
	佐藤寺2	N 3° 0' W	715	1.5
	佐藤寺3	N 4° 0' E	716	8.5
	佐藤寺4	N 3° 30' W	679	1
	佐藤寺5	N 3° 30' W	682	1
	佐藤寺6	N 4° 30' W	691	0
	佐藤寺7	N 2° 0' W	591	2.5
	佐藤寺8	N 2° 0' W	591	2.5
	佐藤寺9	N 3° 30' W	585	1
	佐藤寺10	N 6° 0' E	591	10.5
	佐藤寺11	N 3° 20' E	577	7.8
	佐藤寺12	N 3° 30' W	563	1
禁野本町遺跡第100次	SB01	N 5° 0' W	545	-0.5
	SB02	N 1° 0' W	548	3.5
	SB03	N 2° 0' E	553	6.5
	SB04	N 1° 30' W	548	3
禁野本町遺跡第103次	SB1	N 11° 40' W	570	-7.2
	SB2	N 6° 10' W	567	-1.7
	SB3	N 5° 10' W	551	-0.7
	SB4	N 4° 55' W	548	-0.4
	SB5	N 3° 40' W	539	0.8
	SB6	N 4° 40' W	527	-0.2
	SB7	N 3° 40' W	524	0.8
	SB8	N 1° 20' W	533	3.2
	SB9	N 9° 30' W	545	-5
	SB10	N 0° 50' W	527	3.7
	SB11	N 4° 40' W	567	-0.2
	SB12	N 4° 10' W	554	0.3
禁野本町遺跡第103-3次	SB01	N 3° 0' E	850	7.5
	SB02	N 2° 0' E	850	6.5
	SB03	N 3° 30' W	850	1
	SB04	N 3° 30' E	850	8
	SB05	N 4° 0' E	850	8.5
	SB06	N 1° 0' E	850	5.5
	SB07	N 0° 30' E	850	5
本調査	5号掘立柱建物	N 5° 0' E	527	9.5
	6号掘立柱建物	N 14° 0' E	545	18.5
	7号掘立柱建物	N 24° 0' E	573	28.5

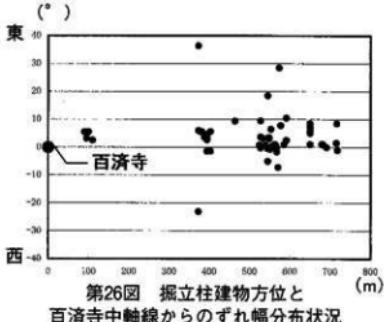


表2 禁野本町遺跡動向・百濟王氏動向・交野行幸関連記事一覧

西面	禁野本町遺跡動向	百濟王氏動向	交野行幸関連記事	
本調査 68次	103次 百济寺跡、百濟寺跡 SI68-01:複弁六弁蓮華文軒丸瓦	徒高1丁下-上河原上 百济王余津山(近畿)	三井・王井松 第2位	
708紀	594	南島 海島・瀬戸・北嶺 南島・瀬戸・北嶺 南島・北嶺 李忠 元忠・源内 元忠・源内・明信(女) 利春・支鏡 仁貴・上鏡・美英 敬弘(女) 敬忠・尚法(女)・貴命(女) 志京・敬法(女)・貴命(女) 安義・重仲・敬法(女)・貴命(女) 聖義・貴命(女) 貴命(女)	有真 敬信 敬信 敬信 明信(女) 仁貴(女) 所仙(女) 明信(女) 812・813・814・815・816・817・818・819・820 821・822 823・824 825・826 827・828 829・830	770光仁天皇即位・771交野行幸 783・787文智孝奉 791・792・793・794・795・799・800交野行幸 802交野行幸・806桓武天皇崩御・平城天皇崩御・809桓武天皇崩御 821・822 823・824 825・826 827・828 829・830
709-710	595			
711-720	596			
721-730	597			
731-740	598			
741-750	599			
751-760	600			
761-770	601			
771-780	602			
781-790	603			
791-800	604			
801-810	605			
811-820	606			
821-830	607			
831-840	608			
841-850	609			
851-860	610			
861-870	611			
871-880	612			
881-890	613			
10世紀以前 佐藤義	614			

について表にまとめた（表2・左列）。

これによると、飛鳥時代後期（白鳳期）では、禁野本町遺跡では掘立柱建物は検出されていない。しかし、禁野本町遺跡の南、百濟寺跡周辺の百濟寺遺跡において掘立柱建物が検出されているとともに、この時期にさかのぼりうる複弁六弁蓮華文軒丸瓦が百濟寺跡からも出土している。この時期の集落の中心は現在の百濟寺跡付近に存在していた可能性が高く、百濟寺のいわゆる「前身寺院」の創建もこの時期までさかのぼる可能性があろう。

奈良時代に入ると、百濟寺跡から北に約600m離れた禁野本町遺跡の103次調査付近で掘立柱建物が検出され始めるが、その棟数が増加するのは奈良時代後半に入ってからである。この時期には103次調査地点で確認された百濟寺中軸線の延長線上に一致する南北道とそれに直交する東西道が整備される。同時に集落の範囲も拡大し、103次調査地点から西へ200m離れた68次調査地点でもこの時期と思われる掘立柱建物が検出されている。さらに百濟寺の薬師寺式配置の伽藍が整備されるのは奈良時代でも末葉であろう。出土量の最も多い複弁八弁蓮華文軒丸瓦や単弁十四弁蓮華文軒丸瓦とこれらに組み合う均整唐草文軒平瓦は、製作技法から770年から780年頃の瓦になる可能性が高いといふ⁵⁶。禁野本町遺跡の南北道が整備されてからのことであり、百濟寺の伽藍はこの南北道に伽藍中軸線が一致するように造営されたと考えるのが自然であろう。

平安時代の初頭においても、103次調査付近で掘立柱建物が確認され造構の密度も高いが、10世紀まで下る掘立柱建物はみられない。一方、103次調査地点から西へ250m離れた、台地の西端にあたる本次調査区においては、10世紀に下る7号掘立柱建物が営まれる。この7号掘立柱建物は、先に見た主軸方向が百濟寺伽藍中軸線と一致しない掘立柱建物のひとつである。

このほかの調査においても概ねこの状況は合致してくるようである。103次調査の西側に隣接する69次調査地点では、奈良時代後期から平安時代前期に属すると考えられる掘立柱建物が7棟以上（図面上では12棟）検出されており、東側に隣接する103-3次調査では、奈良時代後半と考えられる掘立柱建物が3棟、平安時代と考えられる建物が2棟検出されていると報告されている。また103次調査地点から南に100mの5次・6次・84次調査の各地点でも奈良時代から平安時代前期の掘立

柱建物がそれぞれ4から5棟検出されている。また本調査区の北側に隣接する第1次調査地点でも平安時代の掘立柱建物が検出されているが詳細は不明である。

このように、禁野本町遺跡では、奈良時代の前半に第103次調査地点を中心に集落の造営が始まり、奈良時代の後半に大きな展開を見せる。しかもその集落は百済寺の伽藍中軸線と建物の方位がほぼ一致する計画的な集落であったことがわかる。この様相は平安時代初頭まで続くが、9世紀後半から10世紀に下ると、それまでの集落の中心であった103次調査付近は掘立柱建物が見られなくなり、集落が台地西端へ移動したかに見える。しかもその集落はそれまでのようない計画性をもたない建物配置の集落へと変化したことがわかるのである。

(3) 百済王氏の動向

文献に登場する百済王氏の動向について、最初にまとめたのは今井啓一であった。今井は、百済王氏の繁栄は東北経営に成功した百済王敬福の功績が大きかったこと、その子孫についても引き続き東北経営に参画するが9世紀の半ばにはその任をとかれること、桓武・嵯峨朝にいたって多くの女性が後宮に入り活躍するが、9世紀後半に後宮は藤原氏が独占するようになり百済王氏は日本人化することなどを説いた²⁷。

そこで、百済王氏の動向を確認するため、六国史に記載のある従四位下以上の位階に上った百済王氏の人物について、その叙位の状況をまとめた（表2・中列）²⁸。この表によると、初代の禪広以降、百済王氏でも主だった者は四位までのぼることが9世紀の半ばまで続くことがわかる。なかには、禪広²⁹・敬福・勝義・明信（桓武朝尚侍）、慶命（嵯峨朝尚侍）、惠信などのように三位以上にのぼった者もでた。途中、801年から810年まで百済王氏で四位以上に進む男子は出なかった。この時代は主に平城天皇の時代とその後の混乱期で、嵯峨天皇の時代になると、再び百済王氏は従四位下以上の者を安定的に輩出する。しかし850年を過ぎると、従四位下以上の位階に新たに進む者はでなくなり、また五位以下でも元慶三年十一月の記事を最後に正史に百済王氏の名前は見えなくなる。それ以降の百済王氏の動向については、上野利三の研究³⁰が参考となろう。上野は平安時代から戦国時代までの百済王氏の可能性がある人物を32名列挙している。その中で位階の判明する者は11名いるがすべて従五位下を超えない。9世紀半ばを過ぎると百済王氏は主だった者でも位階が五位以下の中下級貴族へと変化すると考えてよいだろう。

さて、交野行幸は770年代以降行われるようになった（表2・右列）。光仁天皇が1回、桓武天皇が13回、嵯峨天皇が14回行っており、桓武天皇・嵯峨天皇の行幸に際しては百済王氏への叙位や百済寺への施入が繰り返されている。嵯峨天皇の没後、仁明天皇が844年に行幸するが、これを最後に交野行幸は途絶える。

早くから指摘されているように、百済王氏は桓武天皇・嵯峨天皇・仁明天皇の後宮に一族の子女を送ることで、皇室と強い関係を築き、貴族としての立場を高めていた。特に、桓武天皇・嵯峨天皇は百済王氏の明信・慶命をそれぞれ尚侍として重用したことが正史にも記される³¹。しかし承和の変以

降、藤原北家の勢力が急速に強まる中で、後宮へ女性を送ることが出来ず、百濟王氏は中下級貴族へ変質していったものと思われる。同時に、百濟王氏と密接に関係した交野への行幸も行われなくなつたものと思われる。

(4) 禁野本町遺跡と百濟王氏

あらためて禁野本町遺跡の展開と百濟王氏の動向の関連を検討してみよう。

まず、飛鳥時代後期には現在の百濟寺周辺になんらかの集落が展開したと考えられる。この時期の集落についてはまだ不明な点が多いが、この時期の掘立柱建物も後の百濟寺中軸線と大きく離れないことから、方位を意識した集落展開がなされたものと思われる。一方、この時期百濟王氏は難波に居住していたことが記されている^{注12}ことから、この集落と百濟王氏の直接の関係は想定しがたい。

統いて、奈良時代前半には、禁野本町遺跡の中心となる103次調査地点付近において掘立柱建物の造営がはじまるようである。もっともこの時期の掘立柱建物の棟数は少なく、実際に大きく集落が展開するのは奈良時代の後半になる。一方、百濟王氏の交野移住の時期については、岸本準二が早くに指摘しているように天平勝宝二年（750）頃、百濟王敬福が河内守を兼任した直後であると考えられる。これ以前に交野移住を求めて、天平十六年（744）二月、聖武天皇が安曇江に行幸した際に百濟王氏が百濟楽を奏して叙位されている。この安曇江は浜津国西成郡に所在したという^{注13}から744年の段階ではまだ浜津に居住していたと考えてよいだろう。このことから、すくなくとも奈良時代前半にさかのぼりうる集落は百濟王氏と直接関係する集落であるとは考えにくい。

奈良時代の後半になると禁野本町遺跡では遺構の数が格段に増え、遺跡の範囲も広がる様子を見せる。あわせて百濟寺も出土する瓦などから、薬師寺式伽藍が奈良時代の終わりには造営されているとみて間違いない。一方、延暦二年（783）十月の桓武天皇交野行幸記事からは、この時期には百濟王氏は確実に交野への移住を終え、百濟寺も建立されていることが知れる。この遺構の数が飛躍的に増加する時期と、百濟王氏の移住の時期にすればなく、奈良時代後半の禁野本町遺跡は百濟王氏と関係する可能性が高いと思われるのである。

平安時代前期に入ても、禁野本町遺跡の掘立柱建物は継続する。しかし、9世紀中にはこれら百濟寺と密接な関係を持ってきた集落は廃絶する。かわって、10世紀には台地西端に集落が出現し、しかも百濟寺の伽藍中軸線方位を意識しなくなる。9世紀の後半になると、百濟王氏は急速に勢力を失ってゆく。この百濟王氏の没落する時期と禁野本町遺跡の集落の質が変化する時期はほぼ一致していると見てよいだろう。

以上のように、禁野本町遺跡の展開と百濟王氏の動向はかならずしも完全に一致するわけではない。ただ、禁野本町遺跡が大きく展開する時期と百濟王氏が交野に移住する時期とはほぼ一致し、さらに集落の配置は百濟寺と密接な関係をもつことから、奈良時代後半から平安時代初頭の禁野本町遺跡の集落が百濟王氏の居住地となる可能性はなお高いと言えるだろう。同時に9世紀以降百濟王氏が勢力を失うると同時にそれまでの集落が廃絶し、質的变化を遂げるのもこれを裏付けるものと思われる。

百濟滅亡から200年余り、日本の古代社会が律令制から平安時代中期の王朝制へと変質していく中で、百濟王氏も変質を余儀なくされたのであろう。

(伊藤文彦)

注1 大阪府1933「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書第四輯 百濟寺跡の調査」

注2 大阪府教育委員会1965「河内百濟寺跡発掘調査概報」

注3 竹原伸仁1983「河内・百濟寺跡と周辺の遺跡について」『古文化論叢 藤澤一夫先生古希記念論集』

注4 財團法人枚方市文化財研究調査会2003「付章 禁野本町遺跡と交野難波宮について」『禁野本町遺跡Ⅱ』

注5 まず報告書においてすでに知られている掘立柱建物について、その長軸の方位角を調べた。また方位角が45度を超えるものについては東西建物としてあつかい、それに直行する角度を方位角とした。最後に、百濟寺伽藍中軸線の方位角を基準に何度ずれているかを計算し、横軸に百濟寺金堂からの距離を、縦軸に百濟寺伽藍中軸線からのずれの角度をとりグラフにした。北から東に向かってのずれの角度を正の値、西に向かってのずれを負の値で示している。なお、百濟寺遺跡SB9501・SB9502・SB9503については図面上からは建物の方位を測定できなかったが、建物方位が百濟寺跡の中軸線に対し $5^{\circ} 30'$ 東偏すると報告されておりその値を採用した。第5次調査・6次調査については図面の方位が南北と考えられるので、座標北にそろえるため $6^{\circ} 53'$ 東へ補正した。また禁野本町遺跡第6次調査の一部と第69次調査については図面上に建物番号が入っていないので、北東から順に仮番号1から12をふった。第103-3次調査は調査区の正確な位置が把握できなかつたので、そのおよそ位置として距離650mとしている。なお使用した報告書については第2章の参考文献を参照されたい。

注6 枚方市教育委員会 竹原伸二氏のご教示による。

注7 今井啓一1965「百濟王敬福」総芸舎。なお、今井の論に対しては論提の一つである「百濟王三松氏系図」の史料価値に疑問を投げかける論考がある（注10文献）が、系団に関する論考をおいても今井の論はなお有効だろう。

注8 701年以降10年ごとに区切り、その時期に從四位下以上の位階にあったことが確認できる者を抜き出した。死後に位階を追贈されているものについては反映していない。一人の人物が10年間で進爵している場合はより高位を探った。

注9 大宝律令施行前で、実際は正廣肆。

注10 上野利三1983「『百濟王三松氏系図』の史料価値について—律令時代層化人の基礎的研究—」「慶應義塾創立125年記念論文集」

注11 「日本後紀」大同三年（808）六月三日条、『三代実録』貞觀五年（863）正月二日条

注12 「日本書紀」天智天皇三年（664）三月条：三月。以百濟王善光王等居于難波。

注13 竹内理三1983「角川日本地名大辞典27大阪府」

本論考を執筆するにあたり、枚方市教育委員会大竹弘之・竹原伸仁氏、八幡市教育委員会大洞真白氏から有益なご教示をいただきました。記して感謝します。

(2006年2月脱稿)

(補足) 脱稿後、(財) 大阪府埋蔵文化財センターより禁野本町遺跡の報告書が刊行された。調査地は第1次調査地点の北側、台地の西端であって、本論考とも密接に関連するものである。この調査では8世紀半ばから9世紀初頭の掘立柱建物群が検出されている。これら掘立柱建物の主軸方向ははいずれも百濟寺中軸線からのふれ幅が10度以内であって、禁野本町遺跡の中心集落の一部を構成していると考えても良いだろう。一方、これら掘立柱建物群は9世紀初頭には廃絶し、その後、11世紀初頭前後の掘立柱建物群まで集落は存在しない。こうしたことからこの調査の結果も、本論考の内容と一致するものと思われる。

図 版

図版一 平成十六年度（〇四〇一四）遠景



北から



南西から

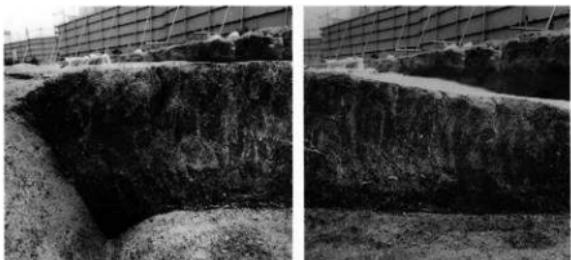


上が北

図版三 平成十六年度 一区 竪穴住居検出状況



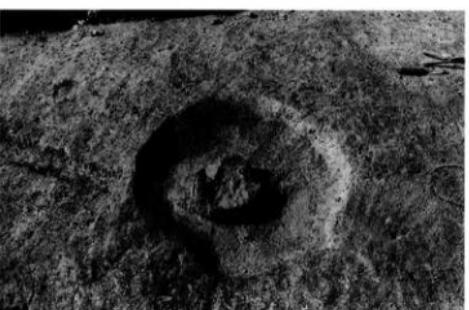
1号竖穴住居
(北西から)



1号竖穴住居土層断面
(南西から)

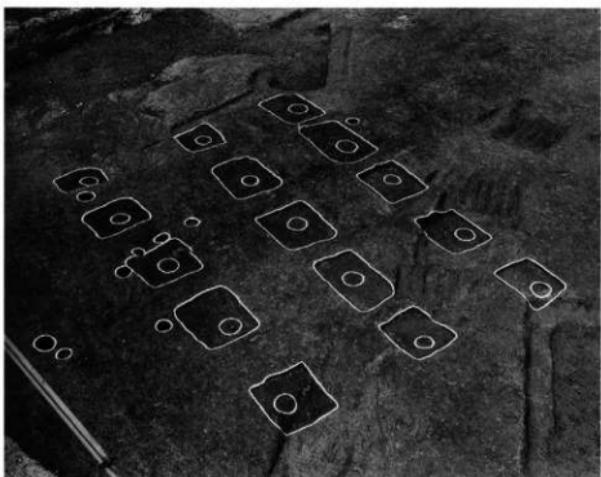


2号竖穴住居
(北西から)





5号掘立柱建物検出状況



5号掘立柱建物柱痕検出状況



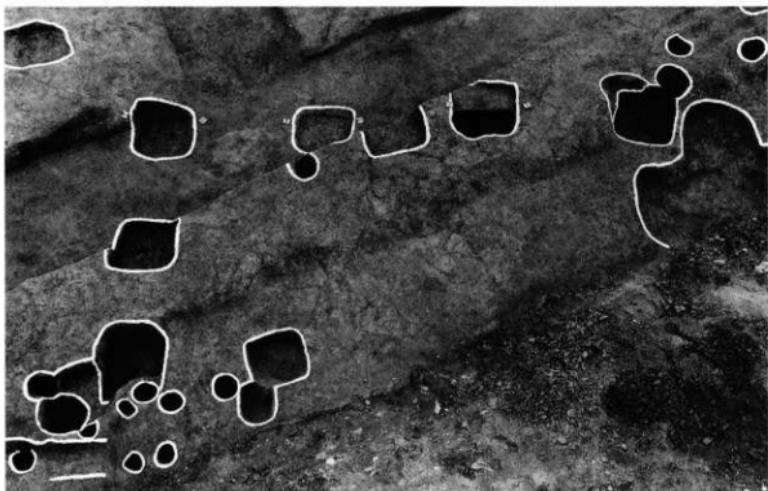
柱穴11

柱穴14

柱穴18（東から）



6号掘立柱建物（西から）



7号掘立柱建物（北から）



東から



上が南



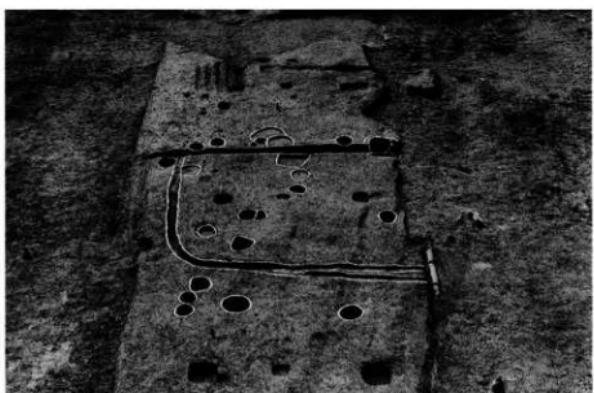
西側段丘崖検出状況
(南から)

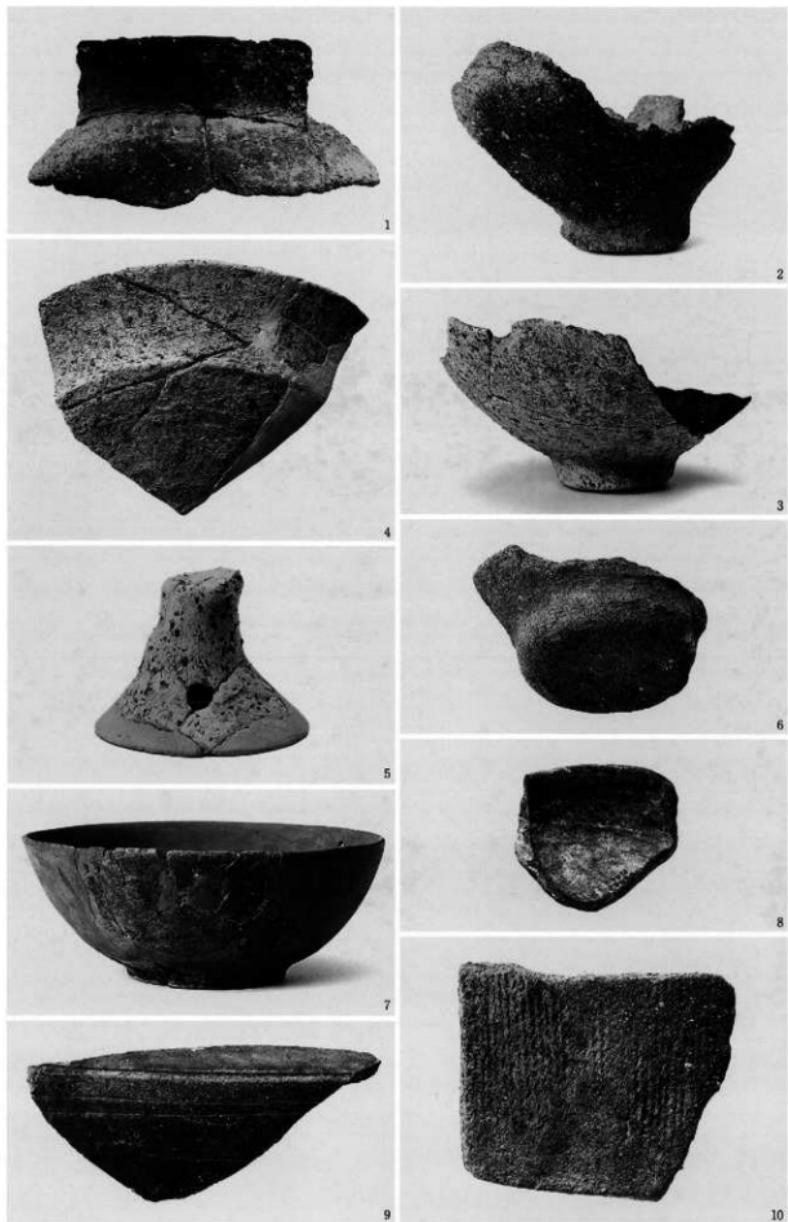


西側段丘崖検出状況
(北から)

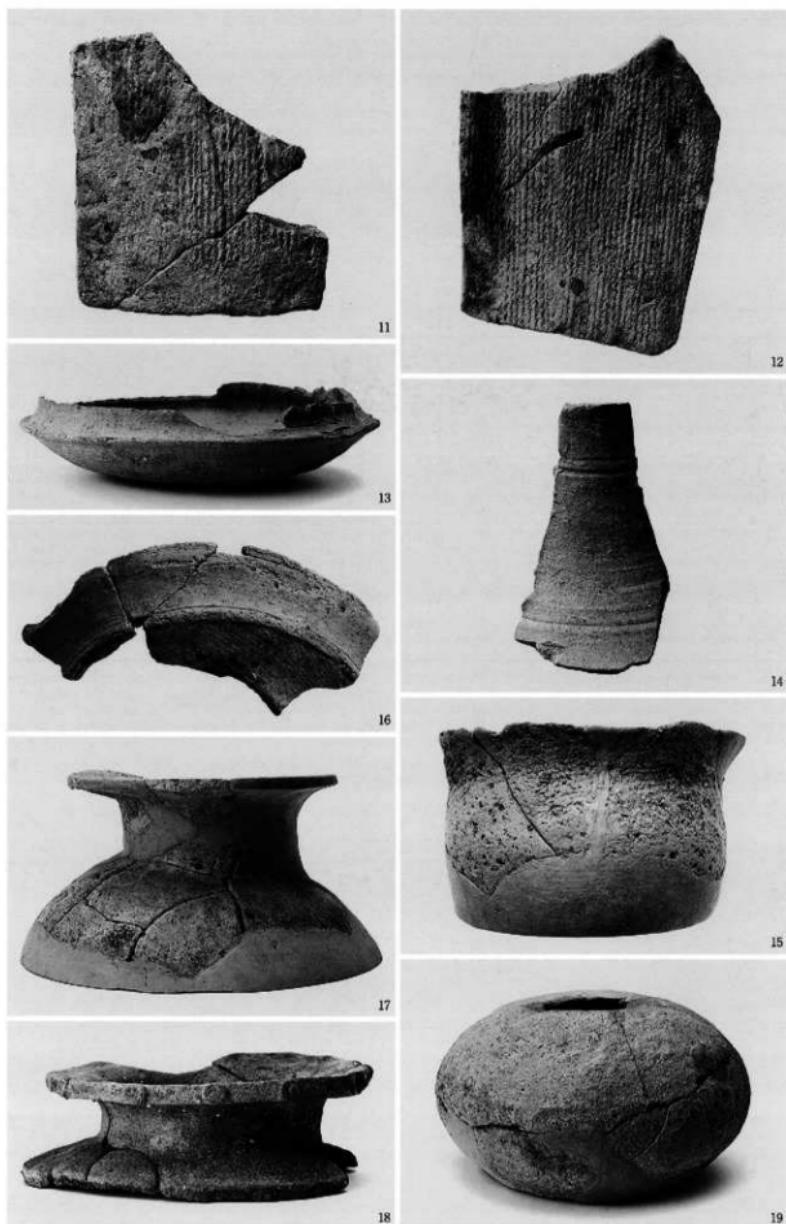


全景
(南から)

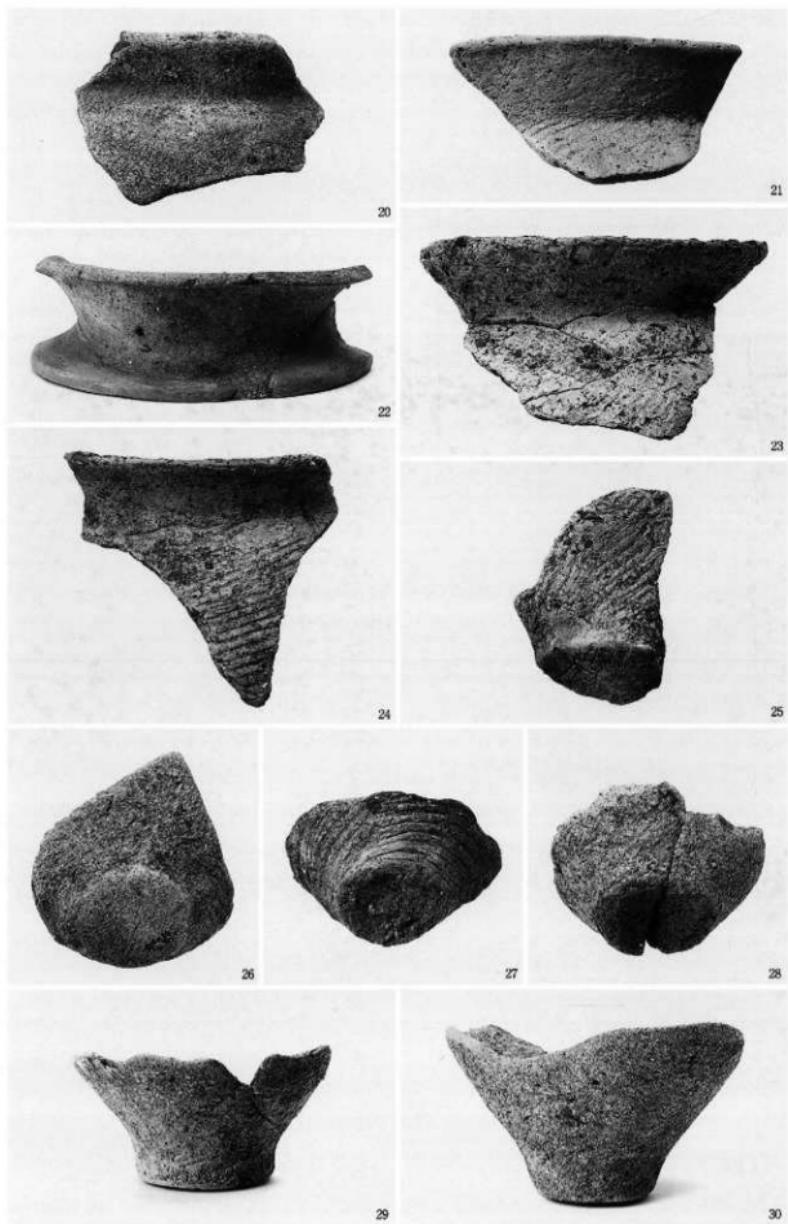




1～5 (1号竪穴住居)、6 (4号竪穴住居)、7 (7号掘立柱建物)、
8 (小穴195)、9・10 (上坑215)



11・12（土坑215）、13～19（包含層出土遺物）



包含層出土遺物



31



33



32



36



37



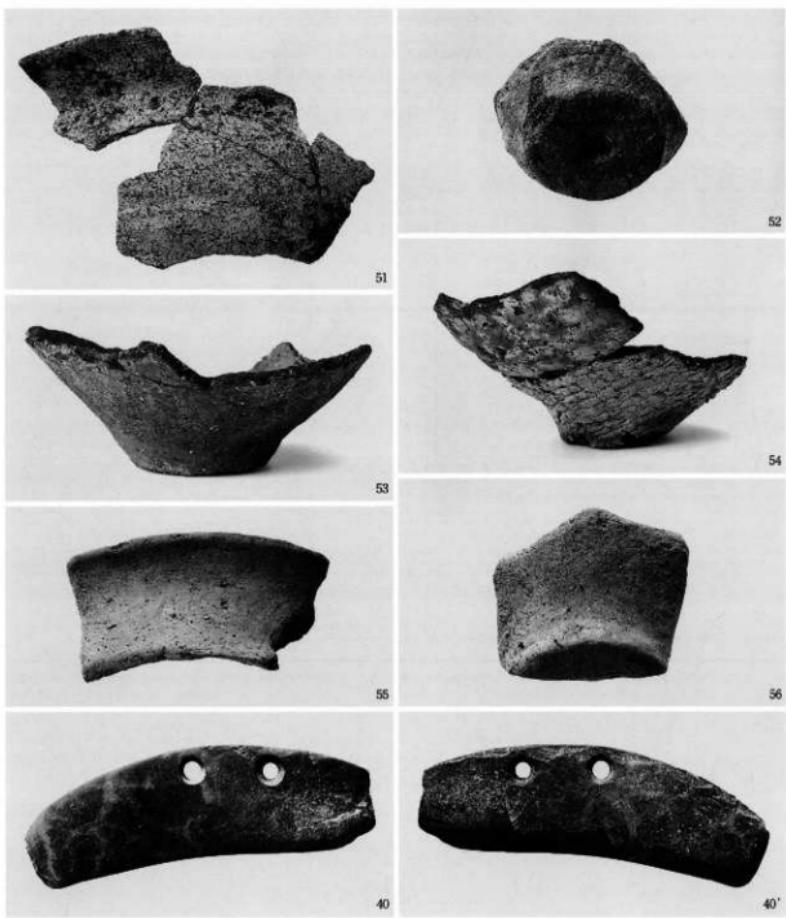
34



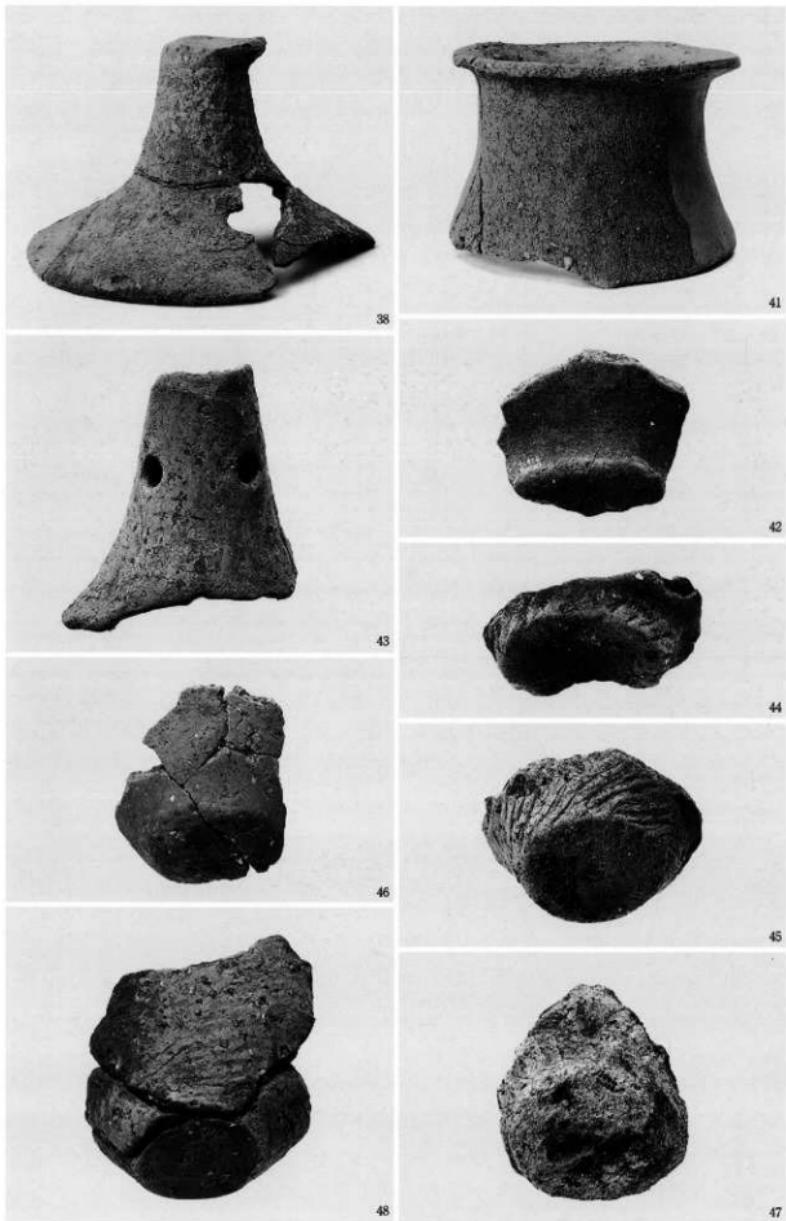
39



35



包含層出土遺物



38 (包含層出土遺物)、41・42 (溝74)、43 (土坑3)、44~48 (土坑71)

報告書抄録

ふりがな	きんやほんまちいせき
書名	禁野本町遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2006-6
編著者名	井西貴子 伊藤文彦 高田麻美 丸山香代
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 Tel.06-6941-0351 (代表)
発行年月日	2007年3月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 ***	東經 ***	調査期間	面積(m ²)	調査原因
		所在地	市町村					
禁野本町遺跡	枚方市禁野本町	27210	116	34 49 16	135 39 23	平成16年6月から 平成17年3月 平成16年6月から 平成17年12月	5,400 3,435	府営「枚方住宅」 建て替えに伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
禁野本町遺跡	集落	弥生時代中期	円形竪穴住居	弥生土器	
	集落	古墳時代中期 から後期	竪穴住居	須恵器 土師器	
	集落	古代から中世	掘立柱建物	須恵器 土師器 瓦器	
	集落	弥生時代から 中世	土坑・溝	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器	
	池	中近世	2基		
要約	弥生時代	弥生時代後期の住居跡2基・溝などを検出。			
	古墳時代	古墳時代の住居跡4棟を検出。			
	古代から中世	住居跡3棟検出。			

大阪府埋蔵文化財調査報告 2006-6

禁野本町遺跡

発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351㈹
発行日 2007年3月31日
印 刷 株式会社近畿印刷センター
〒582-0001
柏原市本郷5丁目6-25

